
剣を捨てた手に掴むもの

ヨイヤサ・リングマスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

剣を捨てた手に握むもの

【Nコード】

N9783V

【作者名】

ヨイヤサ・リングマスター

【あらすじ】

一人の剣奴がいた。

その剣奴の少年は生きる理由がないが死ぬ理由もなかったために、体と心、両方で剣を握り戦い続けていた。

同じ剣奴仲間の血で自らを染め、ただ漠然と生きるために……。

それが自分の生涯なのだと思います、何も考えずに生きていた。一人の少女と出会うまで。

「私の夢を手伝ってくださる？」

そう声をかけてくれた一人の少女との出会いが少年に夢を抱かせた。

ヨイヤサ作品？8 テーマは『熱い物語！&ハウエンクアの人気アップ』

第一話：少年と少女（前書き）

もう少し早く投稿しようかとも思っていたが、ゲームが忙しくて投稿が遅れました。

ですがついに！ 私の大好きな『うたわれるもの』が原作の二次小説を書き始めることができました！！

知っている人も、そうでない人も、のんびりお楽しみいただければ幸いです。

第一話：少年と少女

俺は剣奴である。

「はあっ！」

気合を込めた一閃。

俺の剣が相手の首に吸い込まれるように食い込み、そして空高くその首を跳ね飛ばす。

大きく湾曲した俺の剣の軌道は読みにくいからだろう。

相手は馬鹿でかい大斧を使っていたが、その一撃は俺に届くことはなかった。

周囲の歓声と罵声。これも慣れたものだが俺に降りかかるのはいつもこの二つだけだ。

俺を見に来る連中はみんな、この殺し合いに金を賭けていた連中だろう。

「よくやったレワタウ。
お前のおかげでワシは大儲けじゃ」

「……」

「ちっ、相変わらず無口な野郎だ。

まあ、いい。

ワシを稼がせてくれるのならな」

そのあとに続く、「死ぬまで貴様は闘い続けろ」という同じ言葉を毎日繰り返す俺の飼い主である爺さんを見無視し、俺は手足に枷を嵌められると再び牢屋に戻される。

「……俺は剣奴だ」

今度は自分に言い聞かせるように小さく呟いた。

まるでそうでも言わなければ自分が潰されてしまいそうだったからだ。

だがこんな俺でも死ねない理由がある。

闘いしかないこの俺にも存在意義はある。

それが剣奴として自由のない生涯だとしても、決して捨てることの出来ない誇りはある。

それさえ守れば俺は今の自分でいることに文句はない。

そう思っていた……。

生まれた時から俺は奴隷だった。

ガキの頃は育ての親の元で剣の修行をしながら一族の村で静かに過ごしていた。

だが俺の一族シャクコポル族は村の属する大国ラルマニオヌの奴隷を育てるための村であり、一定の年齢に達したシャクコポル族は王都へと買われていく。

俺も何人かの仲間と共に数年前に剣奴として買われてからはずっと闘いの毎が続いている。

運が良ければ村に帰って農奴として苦しくも仲間と静かに暮らせる人たちもいるがな。

生まれ育った、このラルマニオヌと呼ばれる大国では、ギリヤギナ族と呼ばれる種族が俺みたいなシャクコポル族という種族を虐げており、それが当たり前だとさえ思っていた。

支配がはじまった当初こそ、俺達の先祖は抵抗をしたようだが、圧倒的なまでの強さを誇る最強種族のギリヤギナ族と、圧倒的なまでの弱さを誇る大陸最弱のシャクコポル族では勝負にすらならなかったそうだ。

俺の祖父も、そのまた祖父も最後まで戦いながらも戦の中で死ん

でしまったそうだ。

すべて聞いた話だな。

『レワタウ。争いは必ず終わる。

だから恨んではいけない。

愛しなさい。

全てを』

これも育ての親から聞いた話だが、俺の母が俺に残した言葉だと言う。

俺はシャクコ波尔族、母もシャクコ波尔族。……だが父はギリヤギナ族だったらしい。

『らしい』と言うのは父と母は種族の違いを越えて愛し合い、その結果として俺が生まれたそうなのだが、俺は両親の顔すら知らないからだ。

母の言葉も、育ての親から聞いただけで、その言葉も本当に母の言葉なのかも分からないんだがな。

ギリヤギナ族の高官には、そういう目的でシャクコ波尔族の女を奴隷とする者もいるそうだが、俺の父は母を真剣に愛してしまったために正式に妻にしようとしたらしい。

そのせいでこの国の宰相の側近であった父は地位も財産も全て失い、母と一緒に殺されてしまったそうだが、俺からすればただの馬鹿だとは思えないな。

その時にすでに生まれていた俺は、幸いなのか不幸なのかは分からないが、俺は母の友人——育ての親が庇ったことで一人生き残ることが出来、その女性の元で剣奴になるまでの間を過ごしていた。

育ての母には感謝しているが、庇ってもらってまで得た俺の命は剣奴として生きる羽目になったのだが。

「恨んではいけない……か」

牢屋で鎖に繋がれながら一人考える。

正直『恨む』という気持ちがいまいち分からない。

10歳まではシャクコポル族の村で割と平穏な環境で育てられてきたが、そこから奴隷としてやってきたこの場所では、見世物として闘いの場に駆り出され続けている。

何度か死にかけたりはしたものの、父親がギリヤギナ族だからだろうが……、これまでの努力があるにしろ、他の同族よりも身体能力に秀でているために何とか勝ち続けてこれた。

戦士としての素質を持ったシャクコポル族は少ないようだ。

普通ならこの状況を恨むのかもしれない。

実際に胸の内を熱く焦がすような黒い感情は確かにある。
が、その黒い感情にはどこか暖かさも感じている。

もしかしたら、この黒い感情を負の感情として表に出さないことが俺の母が残した唯一のものなのかもしれない。

しかし、これまでは何とか生き残ってこれたが、これから生き残れるとは限らない。

俺は一生自分の中の気持ちも理解出来ずに、この薄暗い牢屋と逃げ場のない闘技場を往復し、誰かを殺し続け、殺されるまで自由というものを知ることすらなく死んで逝くのだろう。

そう、思っていた。

一人の少女と出会うまでは……

「貴方、私の友としてこの国を立て直してみませんか」

誰も寄り付かない剣奴用地下牢に似合わない美しい声が俺の運命を変えた。

俺が剣奴となって三年目、希望も絶望もすべての感情を捨てて戦いの中で生き、そのまま死んで逝くことを諦観していた俺にとって、初めての希望との出会いだった。

「私の名はカルラウアツウレイ。
皇女としてこの腐った国を改革する者よ」

はつきりと、そう宣言する彼女に俺はどう応えていいのか分からなかった。

第一話：少年と少女（後書き）

主人公は転生者ではないので原作知識はありませんし神様特典もありません。

ですが、気合いと根性と努力で最強になります！

バトル描写はメインではないので強さはあまり意味がないですが心の強さをカルラと一緒に磨いていきます。

そして私は投稿初日は二話更新ですので。

第二話：いつか手を取り合うために（前書き）

カルラの一人称は『わたくし』ですが、小説だと文字数増やそうとしているみたいでセコく感じるので『私』と漢字で表記しますが『わたくし』と読んでください。

他のキャラも『わたし』だろうと『わたくし』だろうと『私』で表記しますので。

第二話：いつか手を取り合うために

いま俺の目の前には一人の少女がいる。

それもこの国の皇女、カルラウアツウレイだ。

「私にはこの国の行く末が分かります。

生まれ持った強さのみに胡坐あぐらをかいているようなギリヤギナ族が支配を続けていてはこの国は終わると思います。

です。で貴方にはギリヤギナとシャクコポル、両種族とこの国の未来のために協力してほしいのですわ」

「……」

俺は正直、皇女様には興味なかったし、俺と同じくらいのがきでしかない少女の戯言に付き合ってやるほどお人好しでもなかった。

ただ、彼女が皇の娘で、俺が剣奴だから聞いてやってただけだった。

そのはずだった……。

「私は思うのです。

この国の民の半数であるシャクコポル族は奴隷としてしか私たち
ギリヤギナと接点を持っていない。

そんなのはあまりにも悲しすぎますわ。

だから……、私と同じ気持ちを持っているでしょう貴方の力を借
りたいのです」

何故か惹かれた。

その目は真剣そのものだったのだ。

確かに他のシャクコポル族と違って、俺は母の唯一残してくれた
言葉に従ってギリヤギナ族を恨んではない。

だが、別段好いているわけでもない。

皇族とは言え、こんな少女の頼みなど断っても良かったのだろう
が、俺の口から出たのは別の言葉だった。

「……ああ」

短いが肯定の言葉。

言った本人である俺でさえ驚く言葉だった。

それだけを聞くと満足げにカルラウアツウレイ皇女は嬉しそうな

顔をしながら、「また来る」と言ってその夜は牢屋を後にした。

「……友……か」

俺には心なんて無いものと思っていたが、どうやらそれは人一倍鈍くなければ生き残れなかった自分の境遇が無意識に感情に蓋をしたのだろう。

皇女が去ったあと、胸に熱いものがこみ上げてきた気がした。

「せいっ！」

次の日もいつものように他者の血を浴びながら勝ち取った『生』に浸る。

相手は両手にナイフを持つ二刀流だったが、如何せん経験不足だった。

俺は右手に持つ曲剣を大振りし、わざと受けさせ、そのまま左手に持つダガーで相手の防御に使ったナイフを弾く。

胴体がガラ空きになったところに、もう一度右手の曲剣を滑るように斬りつけることで相手の心臓までを深々と切り裂いて終わった。

そして牢へと帰り枷を嵌められたまま牢屋の薄い布を敷いただけの寢床に横になっていた。

「また来ましたわ」

「……また来たのか」

昨日と同じように現れたのは、やはりカルラウアツウレイ様だ。

昨日と同じく一人でやってきているが、俺が怖くはないのだろうか？

枷こそ嵌められて牢に入れられているとはいえ、少なくとも剣奴に近づこうと考える奴がまともな頭をしているとは思えない。

自分が襲われるかもしれないという可能性を本当に考えていないのだろうか？

「良かった。」

昨日は返事をもらっただけで、会話とは言えませんでしたから。今日は貴方ともう少し仲良くなりたいのですわ」

「……別にあんたの夢を実現するのには俺でなくてもいいだろう。俺はシャクコポール族だ。」

命令されたならば皇女様の夢物語にも付き合うが、それが実現するとは到底思えない」

彼女の提案に心が揺れないと言えば嘘になる。

目の前の少女は確かに見た目こそ幼いが、確固たる信念を持って決めた決意を俺だからこそ話しているのだろう。

俺の両親は種族が違うという理由で殺された。

もしもこの皇女様の夢とやらが叶ったのならば、それは幸せなことなのかもしれない。

この先俺のようなガキが出てくることもないのかもしれない。

だが、

「貴方の考えは大変立派なことだと思うさ。

俺も出来ることならこの世の全てを愛していきたいと思う。

だがそれは無理だ……」

「それは、なぜかしら？」

「……これまでの歴史が両種族の間に決定的な溝を作ってしまった
いるからだ。

どちらかが譲歩すれば収まるのなら妥協点を見つけることも可能

かもしれない。

だがこの国の皇がギリヤギナであればシャクコポルが、シャクコポルが皇であればギリヤギナが、必ずどちらかに不満を持つ者が皇を暗殺し、永遠に終わることのない闘争を続けるはずさ」

そして巻き込まれるのは民であり、戦となれば負けるのは確実にシャクコポル族である。

結局はギリヤギナ一強の国に戻ってしまうのが目に見えている。

「確かに貴方の言うとおりですわ。

ギリヤギナはシャクコポルを奴隷と見なし、シャクコポルはギリヤギナに対して憎悪以外の感情を持っていない。

だけど……、貴方は違うのでしょうか？」

「……」

「貴方もギリヤギナに恨みを持っているでしょう。

ですがそれは恨みだけでなく何かしら暖かなもので、貴方自身も無意識にその感情によって憎悪を抑えられている。

そんな貴方だからこそ、それが私の夢である両種族の関係改善に必要な存在なのよ」

だが……だが俺は！

「自分の感情を表に出すのが怖い？」

「ッ!？」

「ふふ、その顔は凶星ですわね？」

貴方の目を見て、なんとなく分かっていましたわ。

貴方はシャクコポール族らしくないほどにギリヤギナに対する恨みが表面上は薄い。

それは自分の心を自分自身が一番恐れているからに他なりませんわ」

「……その通りだ」

俺は唯一俺のために残された母の言葉をいまいち理解出来ていない。

少なくとも表面上は恨みを持たないで生きては来れたが、どうしてもギリヤギナ族が……種族としての強さを免罪符のように使って好き放題する連中を愛することなど出来ない。

それは目の前のこの少女に対しても同じだった。

嫌わない代わりに好きにもならない。

それが俺の出した両種族に対する諦観にも似た感情だった。

「貴方は今の境遇を正しいことだと思えますの？
悪い事は悪い！
正しい事は正しい！
それを現実にすることに命を賭けようとは思いませんの！？」

「……俺は……俺には無理だ……」

「……そう」

沈黙が流れる。

皇女様は俯いたまま、俺も彼女の言葉を何度も考えてみたが結果は変わらなかった。

どう考えても俺達二種類の種族が手を取り合う関係になる未来を想像出来なかったのだ。

「では、もしもこの国の皇がもう一方の種族を敬い、皇を決して殺させない強くて頼りがいのある友が側近としていたならば、この国の未来はさつき貴方が言ったような理想の国になると思わないかしら？」

貴方には私の友となってもらいたい。
そうして私の行く末を見て、それでも私の言葉が戯言だと思えば私を斬りなさい」

彼女は諦めてはいなかった。

そしてその信念に嘘偽りは一切なかった。

「良心を持つだけでは駄目なことくらい分かっています。
良心に従って生きていける世の中が必要なのです。」

そして私の未来が貴方の力さえあれば現実のものとなるところまで来たら手を貸しなさい。

私の友として、この国を共に作っていきませんか？」

「……本当に俺なんか手を貸したところで、そんな未来が実現出来ると思うのか？」

「ふふ、質問に質問で返すのはマナー違反ですわ。
ですがその質問、肯定の意思と捉えます。」

貴方は明日より剣奴としての戦いよりも厳しい戦いに身を投じる
ことになりますけど、私が貴方のことを絶対に守ります。

だから……貴方は私を守ってくださいませんかしら？」

そう言って静かな地下牢で、鉄格子越しに薄汚れた俺に手を差し
出してくる少女。

俺の中で渦巻いていた黒い感情が、表に出てくることを拒んでいた
暖かさによって溶かされていくような気さえした。

俺はこのために生まれてきたのかもしれない。

母さん、俺はこれまで生まれてきたことを、恨んでいたのかもしれない。

だがこの輝くような笑顔で夢を語る友と出会うために生まれてきたと言うのなら、少しは意味のある人生なのかもしれない。

俺は差し出された彼女の手を取る。

これがこの先長い付き合いとなる友との出会いだった。

「俺はあんたの夢に付き合おう。
剣奴のレワタウだ」

「私はカルラウアツウレイ。この国の皇女であり、貴方の友よ。
いつか私たちだけでなく、すべての国民が貴方と私のように剣ではなくお互いの手を取り合える世にするために協力してちょうだい」

そう言って差し出されたカルラウアツウレイの手を俺はしっかりと握り返した。

国として、種族としての共存はまだ難しいかもしれない。

しかし俺達はシャクコポリ族とギリヤギナ族の垣根を超えて手を取り合うことが出来たのだ。

この世に不可能なことはないのかもしれない。
ただ少し……難しそうだな。

第二話：いつか手を取り合うために（後書き）

真面目っぽい雰囲気がありますが、あまりシリアスを期待しないでくださいね。

この作品を書くのに一番影響を受けた作品が『カオスレギオン』というとても熱い小説なのですが、主人公をシャクコポル族にしたのは、東方動画の『ママンげ』という作品を観たことで、ウサギの魅力に可能性を感じたので主人公がシャクコポル族になったりした作品でもありますのでw

そしてフロム信者にとってのウサギと言えば、の有名なキャラの要素も混ざっています。

原作崩壊のついでにキャラ崩壊も起こる可能性大です。

一応、第一部的などころは真面目な話が続きます。

これからの展開を期待していただけると嬉しく思います。

第三話：友（前書き）

すこし軽さが出てきましたかね。

毎日の息抜きになるような作品になれば、と思っておりますが、
そうはいかないのがこの作品の作風。

「ダークソウル」の二次小説の方もよろしくお願いします。

第三話：友

翌日、俺は地下牢から出された。

剣奴の管理をしていた爺さんは、剣奴の中でも初戦から連戦連勝の稼ぎ頭である俺を手放すのを快く思っていないようだったが、皇女の命令とあっては断れなかったようだ。

快く思っていなかった理由の一つとして、俺が皇女に気に入られた、というのもあるのだろうか。

その後は実にあっさりと城勤めで第一皇女の御側付きという役職を得ることとなった。

正直この国の皇や官僚達が反対するとはかり思っていたのだが、俺は所詮奴隷身分のために、カルラウアツウレイ様のペットのような認識を持たれているのだろう。

そうでなければシャクコポル族の俺が城勤めなど出来るはずがない。

「これからよろしくお願いします。カルラウアツウレイ皇女様」

「あら、そんな堅苦しい呼び方は結構ですわ。
親しみをこめてカ・ル・ラと呼んでくださらない？」

「いえ、さすがにそれは……分かりました、カルラ様」

「うーん、まあ、いいですわ。」

これからは私の御側付きとしてよろしく願いますわね♪」

どうにも同じ年には見えない妖艶さを持っているこの皇女様は、堅苦しい形式ばった接し方をするとか機嫌を悪くするようだ。

俺としては友として、俺と同じ夢を実現するために厳しい道をあえて突き進もうというこのお方の助けになれば、という思いから差し出された彼女の手を取ったのだが、こんな始まり方で良いのだろうか？

「あら？ レワタウったらまるで私が子どもっぽいと考えているみたいだけど、私の信念は昨日話した通り本物よ。」

私は貴方を友として、同じ理想を抱くものとして私が道を誤った時に私を斬ってくれる人として貴方に背中を預けているんですもの。ただそれだけ。

勿論、貴方が道を違えても私は同じことをしますがよろしいですわよね？」

からかう様な笑みを浮かべ意地悪く聞いてくる我が主。

まったくこの人ときたら。

答えは分かっているだろうに。

「無論だ。」

俺はカルラ様のために、ギリヤギナとシャクコポルの者が手を取り合える平和な未来を作るためにこの命を捧げる覚悟を持ったからこそこうして貴方様の側にいるのです」

俺が必要になることが無ければそれでいいのだが、彼女の進もうとしている道は敵が多すぎる。

そして味方は俺一人と言っても過言ではないだろう。

シャクコポル族を愛するギリヤギナ族がいないように、ギリヤギナ族を愛するシャクコポル族はいないのだから。

彼女の背中を預かる者としては、彼女のために斬らねばならない敵が多そうだ。

「俺の母は父を愛して幸せだったと聞いています。

父は全てを失ってまで母を愛したそうです。

ならば、その子どもである俺が両種族の関係を改善するために一生を捧げるのは本望だと思っているのです」

最近まではそんな自分のやりたいことなんて考えたこともなかったが。

「うん、さすがは私の友ですわ♪
それじゃ名目上は私の御側付きなんですし、仕事を覚えていつてもらいますわ」

「了解しました」

だがこの後俺を待ち受けていたのは地獄のような仕事の山だった。

皇女の仕事というのは基本的に最低限の教養を身につけ、国を維持していくための政で問題^{まつりごと}を起こさないように人心掌握の習得も必須。

そしてそれは、その御側付きにも言えることだったのだ。

「カ、カルラ様は毎日このような勉強をしておられるのですか？」

「まあ、昨日までは剣を振るのが仕事だったレワタウにはきついかもしれないですわね。」

でも、これもいづれ必要になることですし、頭の修練とでも思えば大丈夫なんじゃないんですの？

剣を握る代わりに筆を持ち、体を動かす代わりに頭を使う、と」

「そうか……確かに頭の修練と考えれば、これしきの厳しさも平気に感じてきました！」

私の気合いと根性で必ずやカルラ様の政務での支えにもなれるよ

う精進させてもらいます!!」

「うん、素直でよろしい♪

と、言いつつ私が皇になったら仕事はレワタウに全部任せるつもりなんですけどね（ボソツ）」

「何かおっしゃいましたか？」

「何でもないですわ」

またもや怪しげな笑みを浮かべている。

この御方は悪い人ではないが、何を考えているのか分からないこの笑みが少しばかり苦手だ。

それでもこの方の手を取ったのは他ならない俺なんだし、彼女の期待には出来る限り応えたいと思う自分がいる。

皇族の側近ともなれば政務にも携わることも多いだろうし、これもシャクコポル族の待遇改善と思えば耐えられる！

しかし本当に勉強というのはきついものだな。

……

……

.....

「……そういえばカルラ」

「ん？ 何か質問？」

「ええ、この先の具体的な方針ってのを聞きたいんだが」

俺が彼女の御側付きとなってから半月が経った。

これまでは剣を振り、生と死の狭間で生き残りさえすれば良かった俺は文字すら読めなかったのだが、文字も覚えてしまえば勉強がはかどるようになった。

数学も公式に当てはめれば難しい問題も暗算で解けることが分かってからは、公式を丸暗記し、すでに数字に関してはカルラを越えていた。

それと意外だったのは、カルラの父である、このラルマニオヌ国の皇もシャクコポル族を奴隷として扱ってはいるが、優秀な奴隷ならば城に勤めるのも問題ないとして、俺は皇直々にカルラ第一皇女の御側付きに任命されていたのだそうだ。

この国の皇は戦好きで武力こそ一番と考えているようで、直接会う機会があったのだが、シャクコポル族である俺に対しても護衛と

しての実力を示したらえらく気に入られてしまった。

度量が広いというか……、さすがはカルラの父と言うべき方だった。

そのためか、皇族としての将来の勉強としてカルラに任されていた政務の一部を俺が片付けるまでになっていた。

勿論俺を快く思っていない他の官僚には内密にだが。

そして彼女に対する口調も無理矢理改めさせられた。

俺がカルラに様付けで呼んだり敬語を使うとすぐに拳骨が飛んでくるもんだからな。

「具体的……ねえ。

実はまだ何も考えていないんですの」

「……はあ？」

「いえね、そもそも私がギリヤギナとシャクコポルの両種族の関係を良くしようと思ったのもレワタウと出会う少し前にオンカミヤムカイに住む幼なじみとの会話からですもの」

「オンカミヤムカイ——というと『大神ウィツアルネミテア』を奉る宗教国ですね。

ラルマニオヌの皇女であるカルラの知り合いということは……」

「オンカミヤムカイの第一皇女ウルトリイ。
名前くらいは聞いたことあるでしょう？」

「一応な。」

これまでの勉強の中で習った中で出た周辺各国の名称、地理、皇族の名前くらいは大体把握してるさ」

勿論全てを覚えきっているわけではないが、オンカミヤムカイと言えはこの世界で生きる者の大多数が信仰するウィツアルネミテアという神を崇めるウィツアルネミテア教の総本山である。

民の心の拠り所である宗教を広めるだけの国という立ち位置であるため、他国からも襲われることはまずない。

まあ、不思議な術を使うそうなので武力もそれなりに持ち合わせているのだろうが、それでもどの国からも不可侵として中立な立ち位置で存在しているのには宗教をどの国も重要に考えているからだろう。

ラルマニオヌなど三大強国と言われる国々も決して手を出そうとはしないそうだ。

「私とウルトは幼馴染みなんですわ。」

それで私がこの国を何とかしたいと言うと彼女が色々と知恵をくださったので、レワタウと出会ったのも彼女がきっかけなんですの」

どうやらそのウルトリイ様がシャクコポル族との関係改善にはギリヤギナ族という種族を恨んでいない味方が必要だと伝えたのか。

「それでレワタウも、今日にでも早速会ってみませんか？」

彼女、私たちと同じ年ですけどかなりのものよ。女らしい部分がある♪」

「何が凄いのかはカルラを見れば大体予想出来るが、その発言は聞かなかったことにしよう。」

しかし、となるとウルトリイ様もこの国の未来を憂いて協力関係にある、ということか？」

「彼女も私の友よ。」

昔から仲良くしているけど、レワタウとも今後接点が多くなるでしょうから今から会っておいてほしいんですの」

そのあとに「もしもレワタウに手を出すようなら幼馴染と言えども潰しますが」と小声で言っているが、どういふことなんだろうな。

まあ、確かにこれまで勉強の合間に見てきたこの国の上層部の連中は、良くも悪くも単純な思考の連中ばかりだったし、シャクコポル族との間にある溝を消すためにカルラに協力し、尚且つその友である御方なら会っておくべきなのだろう。

「分かったカルラ。

不肖このレワタウ、貴方様の御側付きとして必ずやこの国の未来に繋がる関係をウルトリイ様とも築いてみせましょう」

「だから敬語はやめなさい！（グチャ）」

思いつきり殴られた。

……俺の日常は幸せなものになったのだろうか？

第三話：友（後書き）

シリアスのみは無理ですw

自身の五作目でちゃんと学習していますので。

ですので今回は前回の話を振り返って少し軽さをメインに押し出してみました。

それでもこの頃は『デモンズソウル』のアストラエアとガル・ヴィンランドの関係を少しばかり参考にしていたので微妙に固さがあります、まあ出会って間もないからということ。その内もつと砕けていきます。

こんな感じで最終的にはハッピーエンドにしていきますのでー。

それとウルトの話は少しあっさりと軽めで行きたいと思います。

第四話：白いのに黒い（前書き）

一応キャラの年齢を個人的イメージで想像しますと、この段階ではまだカルラとレワタウは13歳くらいということ。

それと原作では、カルラは祖国であるラルマニオヌがシャクコポル族の反乱で滅んだあと、剣奴になっていましたがあれほどの美少女を剣奴にするだなんてシャクコポル族は変わりものですね。

まあ、一応争いを好まない平和的な種族らしいですし、女性としての尊厳を奪うよりも、本人の意思で死ぬ自由のある剣奴の方が、カルラがそのうち殺されるにしても後味が悪くないとも思ったのでしょね。

その自らの手を汚したくないという心こそが最も悪であることに気づけなかったために、後のシャクコポル族によって建国したクンネカムン国は内側から崩壊していったのでしょね。

ディー（オンヴィタイカヤン）の介入がなかったとしても。

そんな感じでウルト登場な話です。

第四話：白いのに黒い

「なあカルラ、俺はどうもこういう雰囲気苦手なんだが……」

「あら、いいじゃありませんの。
お似合いですわ。レワタウ♪」

にんまりといたずらっ子のような笑顔を向けてくるカルラ。

今日はオンカミヤムカイの第一皇女、ウルトリイ様がこの国を訪問するということでラルマニオヌの第一皇女かつ、その友人であるカルラが出迎えの準備をすることになっていた。

……のだが、なぜか俺まで出迎えをする羽目になってしまった。

いや、会うこと自体に不満はないし必要なこととも思う。
すでにその旨は了承しているのだからな。

それにウルトリイ様は他国の皇女とはいえ、友誼によってその地位に関係なくカルラが信賴している方だそうなので、その信賴に応えるために出迎えに参加するのはやぶさかではない。

俺も立場上是第一皇女の御側付きだからな。

……しかしながらこの国では奴隷身分であるシャクコポル族である俺が城内をうろつくだけでも問題だと言うのに、カルラは他国の皇女様の出迎えという公の場に俺を同席させようと言うのだ。

国同士のやり取りなのだから、ウルトリイ様の来訪はあくまでオンカミヤムカイ国がラルマニオヌ国に向かう必要のある政務のついでに便乗してくるだけなのだろうし、向こうも正式な使者や護衛が大勢いるだろう。

そんな中に俺なんかがいても本当にいいのだろうか？

カルラは吞気に自室の装飾をしているのだが事態はそれほど簡単ではないと思うのだが……。

「それとカルラ。

俺は御側付きとはいえ、シャクコポル族という奴隷身分だ。戦いに不向きな派手な服はご遠慮願いたいんだが」

これも問題だと思うのだが、俺は今かなり上等な服を着せられている。

何故かカルラの部屋には俺の服まで用意しており、今回の礼装も彼女の部屋にあったものである。

普段はカルラの御側付きとして最低限周り不愉快にしないように上等過ぎず、かつ地味な服（一応護衛も兼ねているので戦闘でも動きやすさも兼ねている服だ）を着ていることが多いが今俺が来ているのは礼服だ。

手には普段から使っている地味な実践向けの籠手を嵌め、足元は奴隷身分らしく履物も履かず素足であるためにどうにも、ちぐはぐな感じが拭えない。

それでも間違っても奴隷ごときが着ていいような服ではない。

この程度の事、とカルラ本人は思っているのだろうが、シャクコ
ポル族を見下している連中に付け入る隙はなるべく少なくなくては
ならない。

俺達の夢に敵は多いのだ。

「私が貴方を着飾って楽しみたかっただけですわ。

他意はありませんことよ」

「こんない服の着てたら城の兵からは喧嘩を売られるだろうし、
普段の仕事にも影響が出るんだがな……」

そもそもシャクコポル族が城内にいること自体、カルラの我儘な
のだ。

その俺がこのような格好をしていては、ギリヤギナ族の中の下級
兵士どもからは妬みの対象以外の何物でもない。

それと、俺もカルラのおS場月として城勤めを始めてから知った
のだが、全てのギリヤギナ族がシャクコポル族を見下している訳で
はないようだ。

その中でも特に意外だったのはカルラの父であるラルマニオヌ皇
だ。

ラルマニオヌ皇は「強い者を優遇する」という何ともギリヤギナ
族らしい考えを持っており、俺がカルラの御側付きになったのも皇

が口添えしてくれたというのもあるらしい。

その他にも俺と同時期に城勤めの兵士となった年の近いギリヤギナ族からは酒の席に呼ばれることもしばしばある。

年の近い連中は、先ほどのラルマニオヌ皇の言葉も「生まれに係なく己自身の強さを何よりも重要視する」という意味でもあり、ギリヤギナ族の中でも生まれが貧しい家の者はその言葉に憧れて兵士として志願してきた者ばかりだ。

俺に対してもそこまで悪い感情を持っていなかったので種族に係なく「楽しい」と感じる事が出来た。

ギリヤギナ族にも悪い奴ばかりではないということを学ばせてもらった。

思っていたいよりはカルラは孤立無援という訳ではなかったようだ、などと心の中で安心してしまう俺がいる。

頼れる人間がいるだなんて、剣奴のときは考えたこともなかったが、これも心のゆとりというものだろう。

これまで知らなかったものを知ると、なんにでも手が届くような大きな気になってしまうが、現実には甘くない。

気を緩めてはいけない。

「ウルトリイ様にも奴隷身分のシャクコポル族風情がこのような服を着ていては不快な思いをさせてしまうのではないでしょうか？」

一応聞いておく。

カルラの友人ならシャクコポル族を嫌っているのなら初めから

両種族の関係改善を勧めたりはしないだろうが、出来るだけ多くの情報を得ておけば、こちらの対処の仕方に余裕が持てるからだ。

「彼女は平気よ。

何ってったって、私の友達なんですもの♪」

どうにも面白がっているだけにしか見えない笑みを浮かべているので言葉の真意は測りきれないが、これがいつものカルラなのは、それなりに付き合ってきた俺は知っているのでもう諦めている。

少しばかり楽観的かもしれないが彼女もまだ子ども。

『楽しい』という感情に忠実すぎるだけだろう。

そして彼女は布地こそ上質ながらも俺よりも装飾が少ない普段着のままだ。

俺の友でありながらも皇族である彼女は、一国の皇女としての威厳がない御方だ。

改善策などないと思いつつも自由奔放なカルラを少しでも皇女らしく振る舞わせるために無駄な思案していると、天井裏から何者かの気配を感じた。

俺としたことがここまでの接近を許すとは油断したか!?

「カルラ、俺の後ろへ!」

素早く腰に提げていた曲剣に手をかけると、友でありながら生涯の主君であるカルラを守るために心を静める。

（気を緩めてはいけないと思った矢先にこれか）

自分を叱責しながらも、冷静に心を鎮めていく。

「……もう、来たみたいですね。

レワタウ、そんなに警戒しなくても大丈夫ですよ。
でてらっしゃいウルト」

天井に感じていた気配は殺気を出すこともなく、天井板を一枚はがすと普通に降りてきた。

「ふふふ、それでも気配を消してきたつもりだったのですけどカルラには敵いませんね。

はじめまして、あなたがレワタウ様ですね。

私はオンカミヤムカイの第一皇女、ウルトリイと申します」

俺は驚いた。

宗教国家オンカミヤムカイを統治するオンカミヤリユー族はその種としての特徴である白く美しい翼を背中に持つと聞いていたが、輝くような金色の髪を伸ばしたその声の主はまさしく絶世の美少女だったからだ。

登場の仕方こそ皇女らしからぬものであったが、その姿は万人が見ても誰一人として疑いようなのない完璧な皇女の姿であった。

……カルラにも見習わせたい。

ドスッ

「今何か私を不愉快にさせるようなことを考えたんじゃないの？」

「……め、滅相もございません。

俺の主はカルラ様だけです……」

「敬語を使わない」

ドズッ

躊躇なく鳩尾みぞおちを馬鹿力で殴ってきたカルラは先ほどから変わらぬ笑顔のまま俺を殴り、そのまま笑顔でい続けているのだ。

……恐ろしい。

ドスドスッ

ぐおおお。

「やってきて一番に私に会いに来てくれるだなんて実に嬉しいですわ。」

でもまさか天井裏から来るなんてね。今頃あなたの護衛たちは慌ててるんじゃないの？

それとここでのたうち回っているのが私の御側付きのレワタウよ」

ぐう、殴られたことで俺の内臓は滅茶苦茶になってしまったために反論出来るほどに回復するまでもう少し時間がかかりそうだ。

「さすがはカルラね。

私の友人だけあって御側付きにもずいぶんと面白い人をつけるだなんて。

あ、レワタウ様、私はあなたがシャクコポル族というのを理由にどうこう言いませんので、私のこともカルラみたいに敬称や敬語を抜きにして軽くお話しでしょ♪」

その言葉は聞き様によっては「お願い」なのかもしれないが、普段からカルラを見てきた俺には分かる。

「命令」だと言うことが。

「はあ、では失礼して……ウルトもカルラと同じでけっこう軽い性格なんだな。

じゃ改めて名乗らせてもらうが俺はカルラの御側付きをしているレワタウだ」

一応俺もこれが地だし、隠すなど言われるのなら普段通りに接す

るとしよう。

命令とは言っても、そこには悪意も何もない、単純に本人がそう望んでいるだけという理由なのだろうしな。

「それにしても私のアドバイスでカルラに良い人が出来たって手紙で知ってたけど、随分とあなたの好みどストライクな方なのね。少し妬けちゃうわ♪」

俺ではなくカルラを見たままウルトは言う。

「レワタウは最高よ。

鍛え抜かれた肉体！ シャクコポル族でありながら努力でギリヤギナ族の私以上の怪力まで持つてるんですもの♪

それに剣の腕もこの国一番ね」

俺が良い人ねえ、まあ悪い人ではないと思うが普段から友であり主である彼女の世話まで色々とさせられているが断りきれないから、というだけだしな。

あまり嬉しくない。

それとカルラよりも怪力な人間だなんているはずがない。

「どうにも私の気持ちちは一方通行で彼にはまだ届いていないみたいだけど、私は本気だから！

ウルトもレワタウを欲しがったりしては駄目よ。

彼だけはあげないから」

「ふふふ、カルラったら可愛いわね。

そんなに言わなくとも私はまだそういうのはいいわよ。

それよりも……早速お話でもしましょ♪」

オンカミヤリユー族らしく翼で浮かぶと（本当は重力を無視する能力を使っているだけで翼は関係ないらしいが）来るときに通った天井裏から風呂敷包みを取り出す。

弁当持参のようだ。

それから短い時間だが俺達三人はカルラのこれからの夢の実現について話し合うのだった。

……こんな三人で本当に国を変えられるのだろうか？

第四話：白いのに黒い（後書き）

原作では「ナ・トウシク」というシャクコポル族の皇が統治する
奴隷貿易で成功した国もありますが、その国の皇は当時まだ奴隷だ
ったカルラをものにして男のシンボルを潰されてしまった
そうですし、ラルマニオヌが滅びた時の子どもの頃のカルラ相手に
同じことをしようとした人も潰されたから剣奴になった可能性もあ
ります。

事実カルラは枷とか普通に破壊していましたし。

第五話：もどかしさ（前書き）

特に前書きに書くことがないので原作を知らない人への説明コーナー。

『うたわれるもの』の世界とは、地球の未来の姿で、細菌兵器だかなんかで「人間にのみ毒性」のあるウイルスが地上にばら撒かれてしまい、地下に逃げ延びた科学者たちが地上に再び戻るためにウイルスが効かない動物のDNAを混ぜた新人類を生み出したのです。その後何だかんだあって人間は絶滅し、残された獣耳たちが地上で生活を始めたという話です。

興味がある方はアニメから入るのをお勧めします♪

マジでアニメは最高！！！！

そして科学者が滅んだ理由も「素晴らしい♪」発言という最高の死亡フラグを建てたからです。まあ、正確には死んではいませんが。

それで、ギリヤギナ族は虎っぽい耳と尻尾があって大陸最強の戦闘種族のために女性であっても筋肉質な体質である。（だがカルラは胸がでかい。腕は細いのに物凄い怪力）

シャクコポル族は兎の耳を生やし、たぶん兎の尻尾が生えている大陸最弱の種族。（尻尾が短い種族は大抵服の中にいれているため不明）

まあ、この世界に二つある宗教のうち、シャクコポル族は一般的には悪い神様と言われる「オンヴィタイカヤン」という神様を信仰しているので、奴隷として扱われるのには、それも理由にあるっばいですけど。

いわゆる邪教崇拜ですね。

事実、作中に登場人物として現れたオンヴィタイカヤンは、争いによって世界を滅ぼそうとしている神様ですし。

後にラルマニオヌ国をシャクコポリ族が滅ぼすことが出来たのはもう一つの大陸最強種族のエヴェンクルガ族という種族が手を貸したというもありますが、彼らの信仰する神様のオンヴィタイカヤンがチートな人型ロボット兵器を貸し与えたからという理由もあります。

この作品では両種族の争いをさせずに終わらせる予定なのでオンヴィタイカヤンの出番はありませんけど。

第五話…もどかしさ

オンカミヤムカイの第一皇女のウルトはカルラと違って、おしとやかで清純で女性的な魅力に溢れた美しい方だと思っていたのだが違った。

それは話を始めてからすぐに感じていたのだが、あえて確認していなかった。

知るのが怖かったと言うのもあるが、普段見慣れたカルラのいたずらっ子のような笑みではなく、ウルトの天使のような笑みに癒されていたいという気持ちからだったのだろう。

だが、本人がその幻想を否定してしまうのでは俺もその幻想を捨てざるを得ない。

言ってしまうえばウルトは大酒呑みだった。

「(こっこっこ) クー♪

やっぱりラルマニオヌのお酒はおいしいですね。

カルラは毎日こんなお酒が飲めるだなんて幸せね」

「美味しいお酒に愛しい従者。

これ以上望むべくもない最高の環境……とはいかないんですけどね」

「それは二種族間の問題ね。

本当に貴方も大変な道を選んだわねえ……。

まっ、それよりも今はこのお酒を楽しみましょう♪」

「そうね。では久し振りの私たちの再会を祝って」

「乾杯♪」

おしとやかに見えてウルトはカルラに負けないほどの酒飲みだったとは俺も予想していなかった。

ようするにこのために屋根裏からこっそりやってきたのだろう。

城内では突如として消えた訪問中の皇女様を探すためにドタドタと走り回る兵士の足音が聞こえるがカルラもウルトもそれを無視して酒を飲み続ける。

まあ、いくら皇族とはいえ、まだ幼い子どもが酒を樽ごと飲むというのはよろしくないことだろうな。カルラはともかく。

俺はカルラが止めても聞かない性格なのは知っているし、その友であるウルトも大体そんな感じなのだろうと諦めているが。

「ほら、レワタウも飲みなさい！

私たちだけが飲んでたらあとで見つかった時に樽を勝手に食糧庫から持ってきたことをなすりつけられないじゃないですか」

「レワタウ様、美味しいお酒ありがとうございます♪」

「……一応言っておくが二人とも飲み過ぎだぞ。

それに俺はこれでも御側付きだから昼間っから酒は飲めない。
いくら大国とはいえ、ラルマニオヌに恨みを持つのはシャクコポ
ル族だけではないんだからな。

カルラを狙うかは置いといて、刺客もそれなりに来るからな」

俺も気を抜いているように見えてちゃんと護衛としての職務には
忠実だ。

カルラは気づいていないようだが、彼女を狙って、これまでも何
度か他国から寄せられた刺客を何度か始末してきた。

カルラ本人は呑気にしているし、知られずに済むならそれでいい。

俺の首に、蛇のように腕を絡めながら、酒を断る俺に酒を勧めて
くるこの酔っ払い姫様には本当のことを告げずにいつまでも笑顔で
いてほしいからだ。

彼女の夢は俺の夢。そして俺達の夢には困難が多すぎる。

せめてまだ政治に深く関われない子どもの内に彼女が笑顔でいら
れる時間を増やすことが俺の日常なのだ……。

「ところでウルト、あんたはオンカミヤムカイの皇女様ってことは

ウィツアルネミテアを信仰しているんだろ？」

カルラもだいぶ酔いがまわて来たからか、口数が減っていたので俺からウルトに話しかけてみる。

「ええ、大神ウィツアルネミテアの教えを広めることでこの国を信仰によって救っています。

ですが、私個人は一般的に禍日神スグイソムカミと呼ばれているオンヴィタイカヤンを否定している訳ではありませんよ」

短い会話で俺の言わんとしていることを性格に見抜く洞察力。
さすがは一国の皇女といえるだろう。

「レワタウ様やシャクコポル族の人たちにとっての信仰の対象はオンヴィタイカヤン。

シャクコポル族がその身体的種族的な弱さ以外で隷属化されている理由の一つはやはり宗教でしょう。

それを確認した上で、これからのお話がしたい、と言うわけですね」

「あら？ レワタウったらウルトが折角やってきた宴の席でそんな真面目な話するつもりでしたの？

お酒でも飲んでのんびりしたほうが楽しいですわよ」

「いや、俺は最初はオンカミヤリユ一の第一皇女様が来るって聞いていたからまじめな話をするのかとばかり思っていたから、その反応こそ驚きだな。

それに彼女にも俺達の夢に協力してもらおうのなら話を聞いておくべきだろう」

すでに頬を赤く上気させ、年に似合わぬ色香を漂わせているカルラは素面でも真面目な話というのが似合わない気もするが、こういう話は早い方がいいだろう。

「話を続けるぞ、……俺は宗教だなんて正直どうでもいいと思っている。

だがシャクコポル族の年寄り連中は奴隷身分に落とされてもオンヴィタイカヤンに対する信仰だけはやめていない。

カルラも俺もシャクコポル族とギリヤギナ族との関係改善を目指しているが宗教の問題を何とかしないと本当の意味で理解し合える日は来ないと思うんだ」

両種族が手を取り合う未来が来るには宗教の問題は見過ごせない。

俺らの夢が実現して、国の政に直接関わる官僚にシャクコポル族が加わると、宗教行事などを行う時、信仰する神によってやり方も変わってくる。

かと言ってそういった行事を廃止するようなやり方は両種族から反発が大きい。

宗教を捨てず、かつお互いを認めさせるには並大抵の方法では上手くないのだ。

「シャクコポル族にとってはウィツアルネミテアを禍日神として扱っているが、それはそっちらも似たようなもんだろ？」

二柱の神は信仰心の熱い連中からは嫌われいてる神様同士だ」

「そうですね。種族間の問題として最も大きな要素に宗教が関係しているのは間違いないはずです」

「俺もそれなりに世界の事を学んできたが解決策はどちらかが消えない限りないと思うんだ。

それでも、異なる宗派の仲を取り持つというのは可能なんだろうか？」

「……その答えは否、と答えるべきでしょう。

異なる宗教を信仰する種族は本当の意味で分かり合える日は来ないと思います。

ただ、そう考えていないのが貴方の主なんじゃないでしょうか」

はつきりとした否定の答えを口にしながらもその表情は笑顔で、俺ではないもう一人に視線を向けるウルト。

にやりと覗かせる鋭い歯が肉食獣のように輝きを見せる不遜な笑

みのカルラだ。

「まったくレワタウは夢に対する情熱が少しばかり足りないんじゃないでしょうか？」

私たちの夢は可能か不可能かで投げ出すようなチンケなものじゃありませんのに、だらしないですわ」

「いや、俺は現実的な解決策を探る意味でウルトに聞いたただけなんだが」

「それでも、ですわ。」

確かにシャクコポル族の信仰するオンヴィタイカヤンは私たちの夢にとって、ギリヤギナ族やシャクコポル族がお互いの種族に持っている憎悪や嫌悪といった感情よりも大きな障害かもしれないけど、それを知ったところで私たちの夢が叶わないということにはならないでしょう？

考える必要のないことは考えなくてもいいんじゃないかしら」

堂々と、酔いを感じさせないしっかりとした口調で俺達の夢を越えに出してくれた俺の友。

その目には力強さがあり、俺はどうやら弱気になっていたのだと気づかされた。

夢を目指すと言いながらも、俺は叶わないと思い、「夢を目指す

行為」そのものを目的にしていたのではないかと。

「レワタウ、私たちはまだ子ども。出来ないことの方が多いですわ。宗教に関しては大人になっても、どうしようもないかもしれないかもしれませんが、私たちの夢はそんな障害に阻まれるほど小さなものじゃないはずですわよ。」

ほら、胸を張って美味しいお酒でも飲んじやいましょう♪」

「カルラ……確かに俺は難しく考え過ぎていたのかもしれない。だがそれと酒は関係ないんじゃないか？」

新たな酒樽を開けようとしていたカルラの手を止める。

「なによ、ケチですわね」

「いや、お前『いいこと言ったな』ってなノリで何いけしやあしやあと酒樽開けてんだよ！

ここは将来の夢の大きさに困難だと思いつつもがんばろう！って感じで真面目な話へ移る展開だろ」

「それこそ私には関係ありませんわ。」

未来は未来、今は今、美味しいお酒と心を許せる友がいる。それだけで私がお酒を飲む理由になりますもの♪」

はあ、まったくこの能天気なお姫様は……。自分の夢がどれほど為し難いか分かっているのだろうか。

だが気づけばその場の空気はだいぶ軽くなっていた。

これがカルラのいいところなのだ。

俺は難しく考え過ぎてしまうために必要以上に苦勞を背負い込んでしまう性質だが、カルラが側にいるだけで自分を多角的に見ることが出来るようになる。

この包み込むような雰囲気を作り出せるカルラこそ次代の皇に相応しいのだろう。

俺は彼女を皇にし、俺達の夢を現実にするためにもこの命をいつでも投げだせる決意を持っている。

まっ、そんな事言っても死にたいわけではないし、俺達の理想が現実になる日をこの目で見るまでは死ぬわけにはいかないがな。

問題の先延ばしかもしれないが、宗教というのは人が幸せになるために考えられた概念的な存在だ。

その片方の宗教を広める国の皇女様も無理だと言うが、本当に心で会話をすれば分かり合えることは不可能ではないだろう。

俺がカルラの手を取ったように、シャクコポル族やギリヤギナ族が、自分の種族以外の誰かと一人でもいいから信じて手をとることが出来れば相手の宗教に関係なく争いは起きないはずだ。

俺が信じるカルラが、俺を信じてくれているように、誰もが当た

り前に望む平和を実現するためなら信仰する神様よりも、目の前の友を優先する。

いや優先することが出来る国を作るために俺達は俺達の夢を現実にしようと努力しているんだ。

それが夢も希望もなかった俺に生きる理由を与えたように、一族の者たちにも希望を持ってほしい。

「……それにしても元剣奴だった俺が皇女様の御側付きとなれたのもカルラのおかげなんだよな」

「レワタウったら、今更どうしたんですの？」

「いやなに、ちょっと前までは夢を持たず、死ぬまでただ生きるだけだった俺が明確に死にたくない理由を持ち、夢を持ち、友である最高の主に巡り合えたこの数奇な運命に感謝しているのさ」

重くなりすぎたと思った俺は話題を変える意味で口にした言葉だったのだが、俺の言葉にウルトは浮かない顔をしていた。

「……………」

「ウルト……？」

俺達のやり取りを眺めていたウルトが、どこか哀しげに見える。

彼女もカルラの友だけあって、解決策を見出せないこの現状に歯がゆいを思いをしているのだろうか？

カルラはその性格からか、「何とかなる」と心から信じ、また本当に何とかするのだろう。

俺もその友を常に間近で見ているために信じられる。

だがウルトには、俺と違ってカルラが常に側にいるわけじゃない。

俺達と同じ理想を目指しながらも、立場的にも一人離れた場所から出来ることが少ない自分に何か思うところでもあるのかもしれない。

宗教国家オンカミヤムカイの人々は、生まれつき『法術』と呼ばれる不思議な力を持ち、背中から生えた翼で分かるように空を自由に飛びまわることも出来るため、戦への介入をすれば戦力としては敵無しとも言える。

だがオンカミヤリユー族は厳しい戒律によって他国への必要以上の干渉を防ぐ決まりがある。

そんな国に生まれ育った皇女となれば、いくら友であるカルラのためとはいえ同じ夢を見ながらも何も出来ないというのが辛いのだろう。

たとえ解決策が見つかったとしても彼女は実質、俺達の夢に協力することは出来ないのだから。

「……ウルト、俺はすでにお前とも友達だ。

確かに気がるに会える間柄ってわけじゃないが、いつでも相談に乗るしそんなに重く考えるなよ。

カルラを見習え」

主に考えすぎない子どもっぽさをもう少し学べ。

「……私を見習えというレワタウの発言には何かしら含むものがある気がするけど。

まあ、私も同じ意見ですわ。

ウルト……貴方は少し考えすぎで本質を見失っていますわ」

少し考えるような素振りを見せるウルト。

「……そうかもしれませんね。

私としたことが少し暗くなっていたかもしれません」

「気にしなくてもいいわよウルト。

私たちが友であり、そう簡単に揺るがない友情で結ばれているのですから、貴方は信じればいいですわ。

私たちが目指す理想への道は何通りもある。

そしてその道筋が私たちと貴方では、少しばかりやり方が違うだけ。

貴方には貴方の出来ることをしていただければ共に夢を目指す行

為に違いはないんですもの」

さすがはカルラだ、ウルトの表情もみるみる和らいでいく。

俺が同じことを言ってもこうまで上手くはいかなかっただろうな。

そうして俺達三人はウルトの教育係の爺さんが見つけるまでの間、しばらく談笑していた。

結局二人は酒樽を2つも開けてしまい、そのことについても御側付きの俺が叱られる原因となってしまったのだが、それはまあいいだろう。

俺に対してもラルマニオヌ皇、カルラの父は酒の旨さを分かる娘をむしろ褒めているのでオンカミヤムカイの連中からだけだったわけだしな。

なかなか腹黒くて、大人しくて、自分に自信を持っていないお姫様だが、ウルトとの出会いは俺にとってもいいものだった。

少しばかり面倒なこともあるが……、だがこれを楽しいと思う自分がいるのが不思議なんだよな。

俺はいま幸せを感じているんだ。

第五話..もどかしさ(後書き)

ウルトは立場上、介入が難しいんですよねえ。

最大勢力を誇る宗教(オンヴィタイカヤンはシャクコポル族しか信仰していない)の教皇みたいな人が治める国の後継者ですから。

それに宗教の問題が絡んでいると書くのも面倒極まりないので熱さでごり押しになるかもです。

まあ、あえて描写せずに、そういうのはハッピーエンド後にして、両種族が手を結んだあとの出来事は書かないでお茶を濁すという手もあります。

作中の用語についても説明しますと、禍日神ヌグイソムカミとはいわゆる崇り神の総称です。

原作ではエヴェンクルガ族のトウカという生真面目なうっかり侍が大事にしている人形やアルルウという少女に手を出されるとヌグイソムカミ化して襲いかかることで有名ですが。

シャクコポル族が信仰するオンヴィタイカヤンも一般的には禍日神扱いです。

あとは変わったところで、廁に入っていると尻を撫でてくるという「エルンガー」という禍日神もいるそうですが何とも珍妙な神様もいたもんですね。

それとこの作品ですが、三日で「ダークソウル」の小説のアクセス数を抜いたのに驚きましたw

読んでいただき、ありがとうございます。

第六話：会議（前書き）

今回は三人称の閑話です。

レワタウがカルラの御側付きになるまでの裏のお話、と言ったところですね。

ちなみに皇^{オウロ}聖上ですので、この二つの呼称はどちらも王様のことを指します。

オリジナルな想像による設定も入りますが、カルラの父であるラルマニオヌ皇は脳筋なだけで悪い人ではない、という独自設定のもとに進めさせてもらいます。

第六話…会議

大国ラルマニオヌの皇は、皇としての能力よりも武人としての能力重要視されている。

それは皇の一番の仕事は戦で兵を導く象徴的存在であり、ギリヤギナ族という国民性から、強くなくては皇たりえないという考えが根付いているからだ。

歴代のラルマニオヌの皇は誰もが武勇に優れた武人なのだが、その歴史の中でも特に今代の皇は抜きん出ていた。

カルラの父であるラルマニオヌ皇は、皇であると同時に戦場では負け知らずの英雄だったのだ。

人は年を取ると、それなりに性格に丸みが出てくるというものだが、ラルマニオヌ皇は老いても変わることなく、戦があれば小規模な小競り合いから山のキママウ退治といった下級兵士が出向くようなものにも首を突っ込み剣を振るいたがる。

真の戦士として、戦いのみを生き甲斐にしていた。

それは戦の大小に拘らない、何よりも公平に強者との戦いを求める者ともいえるだろう。

唯一関心のあるものが戦いであり、戦いに関しては誰に対しても公平な判断をするという意味では、シャクコポール族を奴隸として扱うこのラルマニオヌの中では異端なのかもしれない。

だが、だからこそ……そんなカルラの父である今代のラルマニオヌ皇は賢王と言えるのかもしれない。

「皆の者、よく集まってくれた。

まあ、堅苦しいことは抜きにして、いつも通りに始めさせてもらうぞ」

場所は王城、集まっているのはラルマニオヌ国の皇を筆頭に宰相以下、文官のほぼ全員だ。

ほぼ全員というのは、ラルマニオヌ国の文官は基本的に、頭を使って口で黙らすよりも、腕っ節で我を通させる方が早いと考える武闘派ばかりであり、元々の人数が少ないというのもある。

そのため本当の意味での書類仕事などを片づける文官は、上司であるここに揃った面子の代わりの仕事をしているというわけだ。

それに皇が召集して行われる会議だというのに、各人の前に出されたのが酒というのだから、この国の政治に対するやり方も分かるというものだろう。

酒を飲みながらだが、一応国の行く末を担っているために手は抜

かない。妥協もしない。

それが他国との諍いならば、戦に持ち込んでしまえ、という案がポンポン出てくる以外は特に変わらない会議だ。

「……では、以上で今日の案件は全て終了だな。

……ああ、それとあと一つ。

個人的な話がある」

事前にあった幾つかの案件も全て終わったところで、最後に皇は言った。

「はて？ 聖上、他に何か話し合うことなどありましたか？」

皇があまり国の政に^{せいじ}関与しないために、実質政の全てを取り仕切っている宰相のゴウケンが訪ねた。

「ああ、実はな、俺の娘が今度シャクコポル族の奴隷から一人、御側付きにしてほしいと頼まれてな」

「シャクコポル族から皇女様の御側付きを？」

皇のこの言葉にはその場の全員が疑問に思った。

それはシャクコポル族への嫌悪だけではなく単純に、何故シャクコポル族から？ という疑問でもある。

シャクコポル族は大国ラルマニオヌを統治するギリヤギナ族と比べると、明らかに格下の弱小種族である。

それは奴隸身分だからというだけでなく、持って生まれた武人としての素質がまるで無い者ばかりなのだ。

そのためシャクコポル族は、この大陸に住むギリヤギナ族以外の他の種族と比べても戦いというものが苦手である。

そんなシャクコポル族から、皇はこの国の次代を担う皇女の御側付きをさせるといっているのでこの場に集まった者たちは疑問に思ったのだ。

「失礼ですが聖上、シャクコポル族はギリヤギナ族の奴隸である卑しき身分の弱き者たちです。」

そんな連中から皇族の御側付きを抜擢してしまっただけは他国から付け入られる要因にもなるのではないのでしょうか？」

宰相のこの発言には、その場の全員が同意した。

奴隸身分云々はそうだが、そもそもシャクコポル族のような弱者に、自分たちの国の皇族の護衛など勤まるはずがないと。

「まあ、待て。」

これは俺の娘、カルラからの申し出なのだが、俺自身も賛成していることなのだ」

皇のこの発言を聞いた何人かは「ああ、なるほど」というような顔をし、皇が賛成しているのなりと言葉の続きに耳を傾ける者も表れたが、その他の者はそれでも皇の言葉に疑問を持っていた。

だが皇の顔が冗談ではなく皇自身もそう考えているようなので話の続きを聞かないわけにはいかない。

「俺も最初はシャクコポル族を皇族の御側付きにするのは、実力的にどうかとも思ったのだが、あのシャクコポル族の少年も、カルラの人を見る目も本物だった。

剣奴として、シャクコポル族を含めたあちこちから買い取られた奴隷同士を戦わせて鬪り殺しにする見世物があるそうだが、そこでずっと勝ち続けてきた者なのだ」

何人かはシャクコポル族の剣奴ということで一人の少年が思い浮かんだ。

皇が言いたいのもおそらく、その少年だろう。

「最初はシャクコポル族に強者がいるなどと信じていなかったが、俺はカルラの頼みというのもあって実際にそのシャクコポル族に会ったのだが驚いた。

あれは強くなる、と思ったのさ」

ニヤリと口元を吊り上げて歓喜の表情を見せる皇。

戦いの中で生きてきた戦鬪狂としての歓喜だった。

「ですが聖上、いくら強くともシャクコポル族では御側付きとしての職務を果たせるとは思いませんぬぞ。

精々が毒味役として使い潰す程度でしょう」

「本当にそう思うか？　ゴウケン」

逆らい難い雰囲気を纏うラルマニオヌ皇に、思わず気圧されそうになるがこらえる宰相。

件のシャクコポル族の少年が、『シャクコポル族にしては強い』
という認識しかしていないその場に集まった他の者も、宰相と同じ
考えだったために、皇のこの言葉に驚きも感じていた。

「俺はそいつと手合せしてみたんだがな、俺が楽しめる程の強さだったんだよ。

それもまだカルラと同年という幼い少年がだ」

勿論勝ったのは俺だが、と付け加える皇。

だがそんなことに関係なく一同が驚く。

皇の強さは他国にも轟くほど。

そんな皇を楽しませるほどの強者など、すでにこの大陸には同じギリヤギナ族にすら、ほとんどいない。

高山に住むギリヤギナ族と最強の名を二分する、エヴェンクルガ族の中にも数人いるかないかという強さに関しては無敵の武人であるラルマニオヌ皇を楽しませたというのだから、その実力のほどは分かるだろう。

「俺はあの少年は、御側付きとしてこれ以上ない人選だと思っている。

あと数年もしたら俺を超えるかもしれない。
これほど楽しみなことは他にあるものか」

がはは、と高らかに笑う皇を見て、大半の者がこれはすでに決定事項なのだと悟った。

「し、しかし下賤なシャクコ波尔族などを城勤めにするなどこの国の歴史始まって以来の大問題ですぞ！

聖上、確かにその者はシャクコ波尔族という奴隷の身でありながら聖上を楽しませる素質の持ち主だとしても皇族の御側付きなどさせるべきではないと思います！！」

宰相は声を荒げて叫ぶ。

普段はギリヤギナ族にしては落ち着きのある態度を崩さずに政のすべてを取り仕切っている彼だからこそ、シャクコポル族という奴隷が自分と同じ、この国の権力の中枢に来ることを拒んでいるのだ。
落ち着きがあるとは言っても宰相もギリヤギナ族。
強さや弱さに関わらず奴隷に奴隷以外の地位を授ける皇の発言が我慢ならなかったのだろう。

それでも宰相に同調するのは年おいた古株連中ばかり。
ラルマニオヌ皇と年の近い者やカルラ皇女と接する機会の多い者は「皇が認めるほどに強ければ問題はないだろう」と考える者ばかりで会った。

尚も考えなおすように説得をする宰相に、皇もついには一喝する。

「くどいぞゴウケン！
それともお前が俺に意見するつもりか？」

「ぐ……」

そんな事が出来るはずもない。

皇は誰よりも強いからこそ皇なのだから。

宰相は皇の覇気に気圧され、押し黙ってしまう。

「うむ、なら今日の会議は全て終了だ。
もしも今回の件で文句がある奴がいるなら俺に言ってこい。
そして力をぶつけ合おうではないか！」

皇が部屋を去ると同時に徐々に部屋から退出していく官僚たち。

最後まで残っていた宰相は震える拳を握りしめる。

皇族の御側付きという名誉ある職務に就きたがる者は大勢いる。
先ほどの会議に集まった者の中にもカルラ皇女と年の近い息子を
持つ者もいるが、誰一人として皇に反論した者はいなかったのだ。

宰相に賛同する者でさえ。

それが宰相の怒りをより強くする。

「なぜ……なぜ皇はギリヤギナ族の素晴らしさを理解出来ぬのだ？
シャクコ波尔族のような奴隷を、皇族の御側付きというギリヤギ
ナ族の中でも選ばれし者だけの垂涎の地位などと……、そんな者に
与えるだなんて……」

宰相はギリヤギナ族だが、生まれつき身体が弱かったために戦場
には出れずにいた。

彼の家は代々、ラルマニオヌ国で宰相を務めてきた家柄であり、
ギリヤギナ族としては珍しく、武力よりも知力に秀でている一族だ。

それでもギリヤギナ族。

ゴウケンの先祖、歴代の宰相たちは武人としてより文官としての才に秀でてはいたものの、それでも剣の腕にもそれなりに優れていた。

というのに、ゴウケンだけは一族で唯一剣の才能を欠片すらも持っていないかったのだ。

彼は家族からも馬鹿にされ、それでもいつかは周りを見返したいという一心で唯一の自慢であった頭の良さを利用して、何とか先代宰相の父から宰相という地位を継ぎ、国を維持していくのに大きく貢献してきた。

そのために力こそが全て、強者こそが正しいというこのラルマニオヌでは実質？2という地位だが、その上にいる皇とは大きな力の差があった。

知力で勝つていようと、武力……それだけが足りないばかりに宰相はその地位とは反して権力はそれほど大きくない。

金で味方を増やしたりはしてみたものの、先ほどの会議で誰一人として皇への反対意見を言えない者ばかりだ。

それゆえの怒りだろう。

自分にはないものを持っている奴隷身分のシャクコポル族への怒りは。

「必ず……必ず私がこの国からシャクコポル族を根絶やしにしてくれる！」

皇も、皇女も、シャクコポル族も全て！ この私が滅ぼしてやる

「!!!」

誰もいない部屋に小さく響く宰相の言葉。

そう言い放ったゴウケンも、静かに部屋をあとにした。

第六話：会議（後書き）

ラルマニオヌの宰相は代々世襲制というオリ設定。

いやまあ、原作でも書かれていませんでしたし皇をこんな脳筋に
してしまつては、宰相くらいはきちんと政治をこなせる文官でなく
てはならないと思ったもので。

ちなみに「キママウ」とは農作物を喰い荒らす猿です。どこにで
も現れます。

私はハッピーエンドが好きですし、なんだかんだでこれまでの作
品では悪役も救ったりしてきましたが、今回はちょっと全てのキャ
ラを助けるのは不可能です。

なので可能な限り人死にの出来ないようにハッピーエンドを目指し
ますが原作が原作だけに死ぬ人もいます。

それと分かると思いますがラスボスは宰相です。

彼も単純に支配欲に取りつかれただけの悪ではありませんし、理
由もあるのでしょうが、少なくとも今の考えは悪です。

第七話：懐かしき者たち（前書き）

今回はシャクコポル族の村への帰還を果たしたレワタウのお話。
勿論出ますよ、原作キャラのあの三人が。

たまにはのんびりした雰囲気を書きたいですね。

第七話：懐かしき者たち

ウルトの来訪から一週間ほど経ったある日のこと。たまの休日をシャクコポリ族の村への里帰りとしていた。

だが生憎、俺の育ての親の家で共に過ごした義弟たちは留守にしているようなので、かつて王都へ買われるまでの間利用していた場所にて剣の修錬をしているところだ。

ヒュヒュヒュ

傍目には一回振っただけに見えるかもしれないが風を切る音は三つ。

主に攻撃に用いる右手に持つ、独特の形状に湾曲した剣、シヨ―テルは一瞬で三度の斬撃を放ち練習用の巻き藁を切り裂く。

ドン

次に防御――相手の武器を弾くために左手に持つパリングダガーを全力で突き立てることで標的であった巻き藁を貫通させる。

「……相手が巻き藁ならば貫くことも出来るようになったか。だが、敵は止まってはくれない。

まだまだ夢を実現させるためには、俺は弱いな……」

「いや、その年でそれだけの技量、お主には武の才というものがあ
る」

先ほどから俺の修行を覗き見ている視線には気づいていたが殺気が
ないので放置していた。

その声の主は俺が子どもであることを差し引いてもかなりの巨体。
声を聞くまでは誰かは分からなかったが、その声には覚えがあっ
た。

「久しいなレワタウ。五年ぶりかの」

「お久しぶりですね。ゲンジマル様」

声の主はここラルマニオヌからは遠く離れた高地に住む少数民族、
エヴェンクルガ族の中でも「生ける伝説」と呼ばれる英雄ゲンジマ
ル様。

俺が今よりも幼い頃、わずかばかりの期間とはいえ剣の手ほどき
をしてもらった人だ。

「……ああ、武器これですか。

俺は相変わらずシヨーテルを使っていますが全てはゲンジマル様
の教えによるものが大きいと思っております。

それよりも、いつラルマニオヌへまいられたのですか？」

「この村へは先日着いたばかりだが、懐かしい気配がしたのでな。覗かせてもらったのだ。

それとレワタウ。お前に剣の扱い方を教えたのは某だが、お前と某では扱う武器も違う。

お前の技術は全てお前自身の修錬によって身に付いたものだ。もっと誇ってよいだろう」

「はい、俺は今ではラルマニオヌの第一皇女カルラ様の御側付きですので城内でなどの狭い場所での戦闘を想定するとこの武器が大きな的にもちょうどいいので。

……それに、シャクコポル族風情が一端の刀を持っていたは一族にあらぬ疑いをかけられる要因になりかねませんので」

「……苦勞しているのだな」

ゲンジマル様はそう言うとき、沈黙が流れた。

この方が来たと言うことは孫のサクヤやヒエンにでも会いに来たのだろうか？

俺も昔は剣の手ほどきを受けたとは言え、ゲンジマル様は数は少ないとはいえ、シャクコポル族でも素質のある者には全員に剣を教えてくださった。

別に俺だけに会いに来たわけではないだろう。

「レワタウ、お前には言っておきたいことがある」

「なんででしょう？ 俺が力になれることがあるのなら手を貸しますよ。」

慢心している訳ではありませんが俺はかなり強くなりましたし」

それから少し考えたようなゲンジマル様は首を振り、ためらいながらも何も言わなかった。

「……………いや、やはり止しておこう。」

お前にはお前の道がある。

某がこれからする事は必ずしも正しいことではない」

「エヴェンクルガ族のゲンジマル様ともあろう御方が何を弱気なことを……………」

「お前はお前の道を往け、その結果、某と道が交われば某を倒してでも己の正しいと思う道を往くのだ。」

某が某自身の義に従うように」

そう言って、他に何を言うでもなく立ち去って行くゲンジマル様。

親のいない俺にとっては剣の師であると同時に親のような存在だ。それでもゲンジマル様は俺が自分に付いていくことを望んでいないということは、これからゲンジマル様が行うことに俺は敵対することになるというのだろうか？

「……………駄目だ。やはり考えがまとまらない。
あとでカルラにでも相談するか」

再び俺は修行の続きを始めた。

……

……………

……………

「え？ お爺ちゃんなら来てませんよ」

「おかしいな、さっき俺が修行している時に出会ったんだがサクヤのところにも寄らずに帰ったのか？」

大国ラルマニオヌともなれば持て余した土地というのはある。

未だ発展途上であるこの国は、武力に関しては大陸中に知られる

大国中の大国だが、王都近辺でも耕作されていない土地があり、そこを開墾するために設けられた集落、そこそが俺の生まれ育った村だ。

俺も剣奴として闘技場に引き取られるまではここで暮らしていたが、カルラの御側付きとなってからここに来るのは初めてだな。

「それよりもレワタウお兄ちゃん。

今日は久しぶりに来てくれたんですから泊まって行ってくれるんですよね？

お母さんったら、もう御馳走の準備始めちゃってるんですから♪」

この子は名をサクヤと言い、親のいない俺を引き取ってくれた母の友人の子だ。

まだ7歳だが血の繋がらない俺のことを本当の兄のように慕ってくれる俺の家族だ。

この子には血の繋がった兄もいるんだが、そいつ共々俺が剣奴として王都へ行くことになった時には散々泣かれたのもいい思い出だな。

あれから手紙でカルラの御側付きとして王城勤めとなったことは伝えてあったから今回の来訪もそのお祝いを兼ねているようだ。

……剣奴の時よりも命のやり取りが多くなったのは秘密だが。

「ヒエンお兄ちゃんもハウエンクアさんも狩りに出掛けてますし、今は私だけのお兄ちゃんできてくださいね♪」

「サクヤは相変わらずハウエンクアには厳しくしてるんじゃないだろうな？

あいつも含めて、みんな俺にとって大事な家族なんだから仲良くしろよ」

「あー、お兄ちゃんったらハウエンクアさんの味方する気！？

ハウエンクアさんったらこないだ私が着替えしているのを覗いたんだから！

私あの人嫌い」

「そう嫌ってやるな昨夜。

ハウエンクアはそう悪い奴じゃない。覗いたのだったただの偶然だろう」

覗きをしたというのはあとで問い詰める必要はあるだろうが、あいつのことだから、ついうっかりといったところだろう。

頼りないところも多々あるが、ハウエンクアは自分を磨くことに
関しては妥協しない立派な武士だ。もののふ

「あはははは。でも私が一番レワタウお兄ちゃんのが大好きなんですから、幾らヒエンお兄ちゃんでもレワタウお兄ちゃんは渡し

ませんから」

「いや、俺は誰のものでもないんだがな」

城ではカルラや俺を狙って暗殺者が差し向けられることもあり、常に警戒せねばならなかったが、こういう空気もたまには悪くない。

その後はサクヤに城での俺の仕事（暗殺者の撃退など以外）を話しているとヒエンとハウエンクアも帰ってきた。

ちなみにハウエンクアはサクヤとヒエンの家の近所に住んでいるのでよく食事を一緒に食べる仲である。

「「レワタウ兄さん！」」

「よっ」

「兄さん帰ってきていたんですね。」

この間届いた手紙で無事なのは分かっていましたが、もう少し早く戻ってきてくれても良かったんじゃないですか？」

ヒエンは興奮ぎみに駆け寄ると一気にまくし立てた。

「ヒエン、少し顔が近い。

大体俺が無事なのが分かってたんならそんなに興奮するな。
あと、ハウエンクアも久し振りだな。元気にしてたか？」

「ふ、ふん、僕はレワタウ兄さんの無事ははじめから毛ほども疑ってなかったよ。

でも……元氣そうじゃん」

ヒエンを抑えてハウエンクアに顔を御向けてみると、先ほどは出会いがしらだったからか興奮していたようだが、幾らか落ち付きを取り戻してからは、少し恥ずかしそうに顔を赤くしてそっぽを向いている。

耳まで真っ赤になっているから後ろを向いても隠せていないぞ。

「それよりもレワタウ兄さん。

今日は自分とハウエンクアの二人でキママウを狩ってきましたのでキママウ鍋にしましょう」

ヒエンは玄関に戻ると大きな背負子しよいこからかなり大きなキママウを担ぎ下ろした。

「随分と大きなキママウを仕留めたもんだな。

二人ともこれほどの大物を仕留めることが出来るようになるとは、

俺でさえお前たちと同じ年の頃は鼻たれで何も出来なかったがなあ」

「兄さんはずっと僕らの理想であり、今でもそれは変わらないんだから謙遜しなくてもいいさ。

今回のキママウ狩りは僕の活躍が決め手となったからね。
兄さんにも見せたかったよ」

「ハウエンクア、トドメを刺したのは自分の剣だ！」

「いや、ヒエンが留めを刺す前に僕の剣ですでに虫の息だったからヒエンのトドメなんて無くても狩りは成功していたのさ」

いがみあう二人の弟たち。

この二人も年が同じからか何かと張り合うんだが、もう少し仲良くしてくれればいいんだがな。

「二人の喧嘩の原因はお兄ちゃんに認められたいからだよ、レワタウお兄ちゃん。

私だってまだ小さいですけど、鍛えてるんだよ。

女のシャクコポリ族は体が弱いと農奴にすらなれずにギリヤギナ族の夜伽用の奴隷として連れて行かれるしかないんだもん」

口調こそ明るいがそこに諦めのような暗い感情が隠れているのは

俺の気のせいではないだろう。

事実、この国のシャクコポル族は誰かしらの奴隷なのだから。

「サクヤ……俺はお前みたいなシャクコポル族だからという理由で差別されている一族の仲間が剣を手にすることのない未来を作るために今動いている。

それに知ってるか？

ギリヤギナ族にも種族に関係なく共存の道を歩みたがっている人もいるんだぞ」

「それってレワタウお兄ちゃんが仕えている皇女様のこと？」

「ああそうだ。皇女様、まあ、俺の友だからカルラと呼び捨てにしているんだがな、カルラは俺と同じ夢を見ているんだ。

種族に関係なく、誰もが幸せで、誰もが当たり前に取り合える未来を実現するために皇を目指しているんだ」

俺がカルラを信頼するのは同じ夢を持つからだだけではない。

身分に関係なく、俺のことを友と呼んでくれた彼女だからこそ協力しているのだ。

他の誰であろうと、カルラでなければ俺はここまで自分の夢とまでは思わなかっただろう。

「しかし、レワタウ兄さん。

お言葉ですが、それはギリヤギナ族の皇族に生まれた者が持つ遊びのような感情ではないのですか？

奴隸身分であるシャクコポリ族と本気で共存を目指す酔狂な者が皇族にいるとは思えないのですが」

「そうですね。ヒエンの言う通り、ギリヤギナ族は自分たちこそが最強で、強いから偉いと勘違いしているような腐った連中ですよ。兄さんはその皇女様のお遊びとして御側付きに任命されたのかもしれませんし、木を許し過ぎるのはいけないんじゃないですか？」

ヒエンもハウエンクアも両種族の共存には否定的だ。

それは仕方のないことだろう。

ギリヤギナ族のこれまでしてきたことを考えてみれば、どれほど信用できない種族であるかはよく分かるはずだ。

しかし、それでも俺はカルラの友であり続ける。

俺の心が彼女を信じろと叫ぶからだ。

「今はまだどうなるかは分からないが、それでもカルラは必ず俺達シャクコポリ族と手を取り合う未来を実現するための努力は惜しまない。

勿論俺もそれに協力する。信じなければ変わらないからだ。だから……お前たち三人も人を信じる気持ちだけは失くさないで

ほしいんだ」

この言葉がどれだけ伝わるかはわからないし、ギリヤギナ族の大半は信用してはならない連中だ。

それでも信じなければ何も変わらない。

ギリヤギナとシャクコポル。

二つの種族が未だ主人と奴隷という関係であるのは両種族の間の溝が深すぎて信じられなくなったからなんだろう。

俺はカルラを信じる。

カルラも俺を信じてくれている。

だから俺達の未来は明るいと信じられるんだ。

そんな話をしている間に、ここで俺の育ての母であるヒエンとサクヤの母さんが料理を食卓に運んできたことで話は一旦終了。

三人ともそれぞれに何か考えてくれているようだが、この子たちが人を当たり前のように信じられる国をカルラと作っていききたいと改めて思った里帰りだった。

それは俺が、信じられる者がいない生き方の寂しさを誰よりも知っているからだろうな。

第七話：懐かしき者たち（後書き）

エヴェンクルガ族の英雄のゲンジマルは、確か奥さんがすでにシヤクコポル族という設定があったような気がしますので、たぶんヒエンとサクヤの両親は共にシヤクコポル族ですね。

この時点でレワタウ&カルラ&ウルトが13歳、サクヤが7歳、ヒエン&ハウエンクアが9歳くらいということ。

シヨーテルは元々、農夫が鎌を改良して作った武器……だった気がするので、奴隷であるレワタウはその点も気を使ってシヨーテルを選んだという隠れ設定。

ここに書いてる時点で隠してませんが、そういう事情もあって和風な『うたわれるもの』の世界で刀を使っていないのですよ。刀よりは奴隷っぽい武器ですし。

何となく詳しく調べてみますと、シヨーテルとは（シヨーテルとも言う）全長・75〜100センチ、身幅・1.5センチ、重量・1.4〜1.6キログラム が一般的らしく、S字に湾曲したエチオピアの両刃の剣。

柄は木製で、簡素な作りをしており、これといって手を護る工夫はされておらず、全長は、柄から切先までが75センチ程、曲がった剣身を伸ばして考えると1メートル程に成るそうです。

この湾曲した剣身は意外にも非常に現実的な考えから生まれたもので、盾を構えた相手に対し、その盾を避けて剣先を引っ掛けるなどして傷つけるが出来るようになっていたのですよ。

また、両刃で湾曲した形状から、通常の刀剣のように斬撃等にも向いています。

まあ、独特の形状から生み出される攻撃手段は非常に効果的ですけど、その反面、独創的過ぎる形状のために鞘に収める事が出来ませんし、これを装備する者は、そのまま腰に吊るしたりベルトに挟んだりして持ち歩いていたそうですから、暗殺者の装備としては隠密性には効果の方も半減だと思っんですけどねえw

『デモンズソウル』のユルトはこれを暗殺に仕えるほどの達人なのでレワタウにもそこら辺を学んでもらえれば、と思います。
ダイスンスーン。

弟たちに人を信じる心を教えるレワタウであった。

第八話：蜂起（前書き）

原作説明のコーナー。

エヴェンクルガ族とは高地に住む少数部族で、『うたわれるもの』の世界で二大最強種族として有名。

「義はエヴェンクルガにあり」という言葉も存在するほど高潔な信念を持ち、決して悪を許さない誇り高い民族性からか、戦では相手側にエヴェンクルガ族がいるだけで味方の士気が下がるほど（兵士は自分らの主君が悪だと思うから）。

そして二大最強種のもう一つがカルラなど大国ラルマニオヌのギリヤギナ族です。

バトルメインではありませんが書いておきます。

第八話：蜂起

それは、シャクコポル族の村でサクヤ達の休暇を過ごして城に帰ってきてすぐのことだった。

シャクコポル族が奴隷身分解放のためにエヴェンクルガ族の協力の元に、大国ラルマニオヌのギリヤギナ族と存亡を賭けた大戦が始まったのだ。

「……お父様は最強と名高いエヴェンクルガ族の英雄ゲンジマルと一騎打ちをしたらしいけど、かなりの手練だったそうよ。

自分と互角に戦える戦士が敵にいて喜んでいようだけど……このままじゃ私たちの夢が遠のいてしまうわね」

「まさかゲンジマル様がこのような手段に出るとはな。

義は確かに向こう側にあるし、ラルマニオヌのギリヤギナ族の大半は、大陸最強の地位を確立して戦の場が少なくなった昨今、自分達が暴れる理由が出来たと、単純に喜んでい連中が大半だからな。だがこの戦、想像以上に面倒なことだな」

シャクコポル族で戦士としての素養があるものは少なく、俺のように戦えるものは極少数しかない。

エヴェンクルガ族も、もともと遠く険しい高地に暮らす少数民族である。

助けとしてはエヴェンクルガ族が総出で来るわけでもない。

それでも戦を仕掛けてきたからには何かしら勝算があるのだろうか？

それとも、かつて俺達の先祖がしたように戦って死ぬつもりでなければ……。

「正直、シャクコポル族が、自分たちが死ぬために戦っているのだとしたら、この戦が終わったら同じシャクコポル族という理由でレワタウまで処刑されてしまいそうね」

「そうだろうな。」

ただでさえシャクコポル族の俺が皇女の御側付きだなんて地位に就いているのもカルラや聖上のおかげだが、一族総出で死を覚悟しての戦だろう。

本当にぶつかりあってしまつては勝ち負けに関係なく、戦後は心情的にも俺一人が生き残ることはできないしな」

何よりも一族が滅んでしまつては俺とカルラの夢は現実にするこ
とが出来なくなってしまう。

そうなれば生きる意味もない。

「レワタウ、死んでは駄目ですわよ。」

私は貴方に生きていてもらいたいんだから」

「そりゃ俺も死にたくはないさ。

だがシャクコポル族が反乱を起こしてしまっただけで、戦が終われば俺の意思に関係なくギリヤギナ族も俺の命を生かすことはするまい」

「もしもシャクコポル族に勝算があって今回の戦を始め、ギリヤギナ族を倒してラルマニオヌを滅ぼしてしまえば、逆に皇族である私の方が殺されるでしょうからね。

どの道この戦が終わるまでの間に両種族を何とかしないことには私たちのどちらかが死ぬ可能性は高いわ」

カルラも普段の軽い口調ではなく真剣な表情だ。

これまで長い目で見てきたが、虐げられているシャクコポル族はすぐにでも救いが欲しい。

そのための手段を手に入れた、または死ぬ覚悟が出来たというのなら黙ってこれまでのような服従を受け入れるようなことはしない。

この戦が始まってしまったのも俺達の見通しの甘さ故なのかもしれないな。

「……カルラ、俺は村に戻る」

「そう……一応理由を聞かせてもらえるかしら？」

「俺がこの戦を止めたいからだ」

「シャクコポル族が反乱をやめるとは思えないけど」

「それでもだ。」

俺は信じている。

カルラと俺が抱いた夢がこんなことで終わってしまうものではないことを。

俺は信じている。

同じシャクコポル族の仲間たちがこの反乱を起こしたのと同じだけ『戦いたくない』という感情を持っていることを

俺は信じている。

シャクコポルとギリヤギナが共存出来る未来は必ずあることを」

俺一人に何が出来るのか分からない。

正直な話、皇女であるカルラに側近として認められた俺は、同じシャクコポル族の仲間からも、あまりいい感情を持たれていないだろう。

サクヤやヒエン、ハウエンクアなんかは俺のことをシャクコポル族という最弱種族から英雄が生まれたと喜んでくれているし、大人たちも何人かは、俺のことを奴隷身分の一族の中では出世頭だとして囃す。

だけど駄目なんだ。

俺はみんなが幸せになれる未来でないと俺自身が幸せになれないんだ。

今回の反乱もエヴェンクルガ族がシャクコポリ族に味方しているとはいえ、対するのは大陸最強としてその名を知られるギリヤギナ族の興した大国ラルマニオヌだ。

地の利があり、最強種族でもあるギリヤギナ族の方が圧倒的に有利なんだ。

カルラだって俺を切り捨ててギリヤギナ側として率先して戦えばラルマニオヌの勝利で終わるだろう。

それが夢を捨てる行為だったとしても、奴隷がいなければ大国の農地を耕す者もいなくなり困るのは事実だ。

反乱後にシャクコポリ族の生き残りを全て殺すこともないだろう。

そうして俺以外のシャクコポリ族の協力者を得てそこから夢を再び目指すのも出来なくはない。

それでも、

「私の夢は貴方と一緒に実現できなければ意味がないのよレワタウ。私は道を誤った時に自分の背中をいつでも斬れるように貴方を御側付きに推薦したのよ。

貴方だから一緒に夢を追える、と思って。

だから私は私に出来ることをして、貴方が帰ってくる場所であり続けますわ」

こう言ってくれるから信じられる。

かつて牢でくすぶっていた俺に手を差し伸べてくれたカルラだからこそ俺は友として夢を実現させようと思える。

俺の帰るべき場所はカルラの側だけなのだから。

「俺はシャクコポル族を、カルラはギリヤギナ族を。

なんとか両種族に交渉の場に立つよう頼みこもう。

お互いに話し合いの場を設けることさえ出来れば必ず、当たり前
の平和と幸せを求める道を選んでくれるはずだ！」

別に確信があるわけではない。

たとえ俺達が両種族に話し合う場を提供出来たとしても、どちら
かがその話し合いで互いを尊重出来なければ失敗に終わる。

だが、まだやるべきことは残されているんだ。

俺達の理想を現実にするための努力をする手段はまだ残されてい
る！

「それでこそ、レワタウですわ。

私が認めた無二の親友はこの程度で自分の信念を曲げるような柔
な男じゃない。

ただ私も、信じているから……、レワタウが生きて帰ってくるこ
とを。

この戦は止めることが出来ることを」

「カルラ……」

「さあ！ 分かったら行ってきなさい私の友！

私は私でギリヤギナの説得するのに忙しくなるのですから」

「ああ、行ってくる。

俺たちの夢のために！」

そうして俺はシャクコポル族の村へと向かう。

反乱軍の本拠地にして俺の家族がいる場所に。

俺が俺で在り続けるために……。

「……ふう、行ったわね」

レワタウには、ああ言ったけど、正直怖いわ。

レワタウったら私達の夢のためなら自分の命なんていらなんて考えているんですもの。

でもね、レワタウ。

私は貴方と共に手を取り合って歩む人生が欲しくてギリヤギナとシャクコポルの二種族間の溝を取り払いたい。

だから本音を言えば命を捨ててまで夢を追ってほしくはない。

究極的には私とレワタウさえ生きていればいいとさえ考えている。

でもそれじゃ駄目だと分かっているから私は自分の心のままに生きることにする。

夢を求めて、二つの種族が共存する生き方を。

「ふふ、相変わらず駄目ね私は。

この辺りが甘いと言われる原因かもしれないけど、私は自分のために夢を追いたいのよ」

難しいからと言って投げだせないのが私の選んだ道なのだから。

レワタウは、私たち二人だけが生き残るような未来を平和だとは思ってくれないでしょうし、私だって死にたくないだけでこの国を改革したい気持ちは誰にも負けない。

でも私は……、ほんの少しでも彼が幸せに笑う顔が見ればそれで満足なのよ。

「お父様は戦馬鹿ですけど、少なくとも伊達や酔狂で皇をやっているわけじゃない。

私が説得すれば、シャクコポル族とも本気で話し合いの場くらい設けてくれるはずですわ。

そうしてお互いに心があることに気づけば何とかなる」

私は皇であるお父様の説得のために部屋を出て、レワタウが開けっぱなしにした扉を閉めながらお父様の元に向かった。

私たちの夢を現実にするために。

私たちの夢が終わらないことを信じて。

第八話：蜂起（後書き）

カルラは段々と友として以上にレワタウに惹かれていく、というのが活かされていく話になればいいと思っておりすがしばらくは甘々な話はなさそうですね。

ちなみにエヴェンクルガ族の英雄ゲンジマルとラルマニオヌ皇のカルラの父は七度剣を交わし、七回目の戦いでカルラの父が死んだことでラルマニオヌは滅びたそうです。

なので今回の戦はまだ一回目、このあと最後の決着がつく前にカルラとレワタウが両種族に互いを信じる心を持たせることで歴史を変えていこうと思います。

そういえばカルラの弟のデリホウライはまだ出ていませんが、あまり使う予定はありませんので。

第九話：誰もが望んでいること（前書き）

主義主張、感情、人の数だけ答えがあるものですが、一番に考えるべきことは誰もが幸せになりたいと望んでいることです。

当たり前に幸せで、当たり前に平和で、当たり前に愛する者と共に生きて死んで逝く。

そんな「当たり前」を守るための手段に武力を用いた時点で人は心に弱さを作ってしまうのだと思います。

その弱さが迷いに繋がり、落ちるところまで落ちて行ってしまうのでしょね。

第九話：誰もが望んでいること

まず最初に俺が向かったのは一族が住む村だ。

向かっていく途中にも分かったが、村に行く一本道の途中に前に来た時にはなかった拒馬槍が設置され、遠くには櫓やぐらまで組まれているのが見える。

道中この戦のおこぼれを欲してきたのだろう賊らしき連中に襲われたが残らず始末して近くを流れる川に流しておいた。

「止まれ。見たところシャクコポル族のようだが今は余所者を入れるつもりはない」

村の入り口には普段は見ない門番までも立っていた。

どうやらこの戦、勝つつもりで起こした反乱なのだろう。

「俺の名はレワタウ。ゲンジマル様に俺が会いに来たことを告げてもらえないだろうか」

この国の第一皇女の御側付きという地位に就いている俺は、良くも悪くも一族では知名度が上がっている。

それにゲンジマル様が来ているのならば話も聞かずに門前払いなどほしないだろう。

「レワタウ殿でしたか。

でしたら、すでに聞き及んでおります。

ゲンジマル様でしたら村の奥、村長宅におりますのでそちらにどうぞ」

俺が来ることはすでに予期されていたのか、特に問題なくすんなり村に入る。

「分かった」

やはりゲンジマル様は来ていたのか。

できることなら居ないでほしかった。

もしかしたら師匠でもあるゲンジマル様と剣を交えることになるかもしれないから……。

「まあ、そうならないようにするために、俺はここに来たんだ。

それにゲンジマル様も言っていた。

自分の信念に従って行動するように、と」

そう呟きながら村長の家に向かう。

思い出すのは前に会ったときのゲンジマル様の言葉。

ゲンジマル様はあの時すでに俺と敵対する可能性に至っていたのだろう。

「ゲンジマル様、おられますか？」

レワタウですが少しお話があるのですが」

中に入ると村の男衆が集まって話し合い、村長の隣にゲンジマル様の姿を見つけた。

「レワタウか、お主が来たと言うことは我らの側に付くことにしたのか」

ゲンジマル様ではなく俺に気づいた村長がそう言うと、途端に歓声上がる。

剣奴としての活躍もさることながら、俺は皇女であるカルラの御側付きとしてシャクコポール族の中でも特に武勇に優れる戦士としての実力を評価されているのだ。

その俺が味方についたとなれば一族の士気も上がると言うものだろう。

「……いえ、ゲンジマル様。

俺はこの度の戦を止めるためにやってきました」

ゲンジマル様は半ば予想していたのだろう。

特に落胆する様子を見せないが、周りの一族の大人の反応は明らかに敵意の籠った視線をぶつけてくる。

「レワタウ、お前は一族を裏切るつもりか？」

そう言ってきたのはこの村の村長だった。

俺が幼い頃から色々と面倒見てもらってきたが、それは俺がシャクコポリ族の中で数少ない戦士としての素質を持っていたからであり、今回のような有事の際に戦力とするためだったのだろうと、子ども心ながら俺は気づいていた。

「いえ、村長。俺は一族を裏切るつもりはありません。

ですがこのような無駄な戦を起こして命を捨てる行いを止めたくてこの場に参上した次第です」

その証拠に俺は帯剣せずにここに来た。

ここに居るのは俺と同じシャクコポリ族の仲間たち。仲間すら丸越しで説得すら出来ないようなら俺が俺自身の手で夢を捨てる行為に思えたからだ。

そしてその話し合いの機会を得て、実際に戦を取りやめてもらえるまで説得するのが俺の仕事だ。

夢への足掛かりだ。

「レワタウ、この戦は無駄なんかではない。

これまで虐げられてきた我々シャクコポル族の総意であり、奴隸身分からの解放を求める正当な戦じゃ。

現に、エヴェンクルガ族のゲンジマル殿が此度の戦に参戦してくれたのがその証拠じゃろう」

口調こそ穏やかながら、ゲンジマル様が味方をしてくれるなら自分たちの方が正しいという絶対の自信を持った答えを示す村長。

周りの大人たちもその意見に賛同するように首肯している。

俺はそんな村長から目を逸らし、ゲンジマル様に視線を移して言う。

「ゲンジマル様、貴方は本当にこの戦に義があるとお思いですか？」

俺のこの発言にこれまでギリギリで堪えていた大人たちが立ち上がり、口々に罵声を浴びせてくる。

「ゲンジマル殿が間違っているとしても思うのか!?
この若造が!!!!」

「儂らはゲンジマル様の助けを得てこの戦に勝利せねばいかんのだ」
「ガキが戦に口を挟むな!」

誰も彼もが激しい怒りの籠った視線を向けてくる。

シャクコポル族としてこれまで耐えてきた怒りや憎しみ、それら
全てをこの戦に懸けていたのだ。

それを取りやめるように言われれば仕方のないことでもあるだろう。
う。

それでも殴りかかってきたりせず、話を聞く姿勢をまだ持つてく
れているのならば、まだ説得は可能だ。

ここにいる面々は争いを終わらせるために剣を手にとっただけな
のだろうから。

確かにこれまで剣奴として感じてきた以上の本物の殺意さえ籠つ
た視線を感じるが、俺には引けない理由がある。

俺がここにいるのは俺の信念、俺の理想、俺の夢、そして俺の友
に見送られて、この場にいるのだから。

カルラと俺の二人が目指す夢のために、俺達の理想、俺達の夢、
俺達の信念のためにここにいるのだ。

「静まれえい！」

一括したのはゲンジマル様。

最初にこの方の眼を見た時、少しばかり迷いを感じていたのだが、それは今も変わらない。

「この戦をせずとも、シャクコポル族とギリヤギナ族の関係を改善する策でもあるというのか？ レワタウ」

「そう聞いてくる、ということはゲンジマル様も心の中に迷いがあるからですよ？」

「……」

沈黙は肯定なのだろう。

最も頼りにしていた味方であるゲンジマルが押し黙ったことでの場にいる一族の大人たちにざわめきが走る。

「ゲンジマル様、俺は今、第一皇女のカルラの御側付きとして城勤めをしております。

それは彼女が——この国の皇女が俺を奴隸ではなく一人の人間として、友として認めてくれたからです。

そして俺にとっても彼女は友です。

彼女は……カルラは俺達シャクコポル族とギリヤギナ族の間にある溝を埋めるために皇を目指しております」

それが俺の――俺たちの夢だ。

難しいことなのは分かっている。

具体的な方策も未だ定まっていない。

共存の道を目指して両種族が手を取り合ったところでこれまでの長きにわたる憎しみが完全に消えるとも思えない。

だが、それがどうした！

俺達は誰もが平和を望んでいるじゃないか。

現にここに集まった一族の大人たちも平和を求めて戦を始めようとしている者たちではないか！

難しいことなんて考える必要はない！

ただ一言、幸せになりたいと言えればいいだけなんだ。

安心して暮らせる幸せが、愛する者と暮らせる幸せが、他人と分かち合える幸せが。

そんな幸せが欲しいと願えばいいだけなんだ！！

「それに、ここにいる皆の中で一度でもまともにギリヤギナ族と話をした方はおられますか？

俺は城勤めになってから多くのギリヤギナ族と話をする機会を得た。

その中にはカルラ以外にも平和な世を、俺達シャクコポル族との共存を望む者だっていたんだ。

ギリヤギナ族のすべてが悪いわけじゃない。

確かにギリヤギナ族の中にはシャクコポル族を奴隷としてしか見ない『悪』もいる。

だが最も『悪』なのは、相手のことを知ることが出来ないこの環境こそが『悪』なんです！

それは俺達シャクコポル族にも言えることでしょう？」

ゲンジマル様が迷っている一番の理由は、ギリヤギナのすべてが悪ではないところにあるのだろう。

この戦の先触れとして、実際にラルマニオヌ皇と剣を交えたからこそゲンジマル様には分かるはずだ。

少なくともこの国の皇、カルラの父は武人として戦う相手には敬意を払っている。

そのことを一番感じ取ったゲンジマル様だからこそ、ギリヤギナ族そのものが悪とは思えなかったのだろう。

そしてもう一つ。

シャクコポル族も憎しみに囚われ過ぎているところにある。

このシャクコポル族による反乱がどのような結果になろうとも、大勢の者が死ぬ。

それは何も、実際に剣を手で戦う者だけではない。

戦うことのできない女子供、老人たちだって死ぬのだ。

「さすがだなレワタウ……、某がこの戦に感じる迷いもすでに理解しているのだな。

しかしどうする？

すでに戦の火ぶたは切って落とされた。

どちらかが引くなど、最早ありえんぞ」

「俺が終わらせませす！

すでにカルラが王都でギリヤギナ族を纏めようとしています。

俺がここでゲンジマル様をはじめ、一族の皆を説得して両種族に交渉の場を設けることさえ出来れば必ずや……必ずや、この不平等な身分差別を撤廃させてみせませす！」

先ほどまでの刺々しい空気が晴れていくのを感じる。

所詮は子どもの戯言と思っていたのだろうが、俺は皆が幸せになれる夢を真剣に追っている。

それこそ俺の父が母を愛したように。

幸せを追い求めることが『生きる』ってことだろう！

その手段に武力を用いることに何の価値があると言うんだ！？

俺の言いたいことは言った。

村の皆が、まだ少しでも種族の垣根を超えて、お互い手を取り合う理想を少しでも求めてくれなければ俺の夢なんて潰れてしまう。

だけど信じている。

弱小種族と言われる俺達シャクコポル族だからこそ、他のどの種族よりも平和の大切さを分かっていると。

信じている。

俺とカルラの夢がこんなところで終わるはずがないと。

「……まさかレワタウに、こんな当たり前のことを言われるとはのう」

感慨深そうに村長が言う。

「俺もカルラがいなければ、こんな無謀な夢を見たりもしませんでしたよ。」

ですが彼女は本気で俺達と手を取り合う未来を望んでいる。

それも彼女だけじゃない、ここにいて皆が考えているよりもずっと多くのギリヤギナ族が共存を望んでいるんです」

正直彼女に出会わなければ一生を剣奴として終えていただろう。

夢を見ることも、己の心と向き合うこともせずに。

「確かに我々を嫌うギリヤギナ族もいます。ですが少なくともカルラはそんな奴らとは違う。

この戦を話し合いで終わらせるための場を設けてくれるはずです。せめて一度だけ、彼女たちギリヤギナ族を信じてみてはもらえないでしょうか？

話し合ってすらいらないのに話し合いの余地がないだなんて決めつけないでください！

お互いを理解する心を持ってください！！」

静まり返った場に流れるのは一つの方向に纏まろうとしている空気。

その方向性が平和へと向かうことを望んでいる。

「ふむ……レワタウがそこまで言うのなら、わしら大人も気張らにやいかんのう。

ゲンジマル殿、聞いての通り我らは一旦、武装放棄をしますじゃ。レワタウの信じるカルラ皇女と王城側からの態度にもよるが、やはり我らも戦はしとうない。

話し合いすらせずにこちらの要求を一方的に武力で押し付けるなぞ、ギリヤギナ族のようなもんじゃしのう」

村長も分かつてはいたのだろう。

それでも一族を率いる物として弱さを見せるわけにはいかなかった。

しかし、その考えが自分たちの忌み嫌うギリヤギナ族と同じだと気づいたからこそ、ギリヤギナ族にも共存を望む者がいることに気づいたからこそ、自分たちの一番の目的である平和を共に分かち合う道を探すという考えに至ってくれたのだろう。

「そうですか。」

……申し訳ない村長殿。

某は戦うことでしか救いがないと思い、レワタウに言われるまで、この戦の無意味さを、あえて見ないようにしていたようです。

確かにもう一度、話し合う余地はまだあるかもしれません」

「なんのなんの。」

儂らとてそれしか道がないと思っておったのじゃ。

戦が間違いとは思わんが、平和を望む者がギリヤギナ族にも居るのなら、話し合いの努力すらせずに武力を用いるのはシャクコポル族云々ではなく、人として道を踏み外す行為じゃからな」

周りの大人たちも、表情を和らげている。

俺を信じてくれたのだろう。

そう、俺達の先祖はギリヤギナ族との交渉すら出来ずに一方的に蹂躪されたそうだが、俺達はまだ一度もまともに話し合っていないのだ。

ここにいる皆は、どうせ死ぬつもりがあるのなら、義を通してか

ら。そういう考えがあるのだ。

俺も周りの笑顔に、ここに来る前まで波立っていた心が静かになるのを感じた。

だが、この場の静かな雰囲気を打ち破るほどの大きな音を響かせて、村長宅の扉が開かれた。

「村長、大変だ！

王城にてカルラウアツウレイ皇女がラルマニオヌ皇を殺害して牢に捕えられたそうです！」

斥候に出ていた者だろう、慌ただしく入ってきた男の言葉により場の空気が凍る。

……なぜだ？ カルラがそんな強硬な手を取るはずがない。

すでにシャクコポル族側は交渉の準備をする気になっているのだ。

「申し訳ありませんゲンジマル様、村長。俺はすぐに城に行きます！ カルラがそんなことをするわけがない！」

「分かった。

わしらも情報を集め次第、城へ向かおう。

そして、これからどうなるかは分からんが、こちらは話し合いの席を望んでいるとも伝えてほしい。

儂らはすでに、お前が信じるカルラ皇女を信じているのじゃ」

村長の言葉を聞くと、俺は一直線に城へと向かった。

唯一分かっているのはカルラに危険が迫っていることだけだ。

「カルラ……、何があったと言うんだ……」

第九話：誰もが望んでいること（後書き）

言葉が通じるのならば話し合おう。

お互いに違う価値観があるとしても本当に武力を用いなければならぬかをもう一度考えよう。

皆が望んでいる平和とは争いから生まれるものなのか考えよう。

それだけで問題が解決するとは思えませんが、少なくとも筋を通せなければどちらが正しいにしろ、いつかはその戦いで勝った方も、負けた方と同じ道を辿ることになると思います。

何やら青臭いことですけど、私は本当にこんな考え方が出来る人が増えてほしいんですけどねえ。世の中まなりませんよ。

それにしても『うたわれるもの』の世界は地球の未来の姿なのに、なんで騎乗用の動物が「モンスターファーム」のディノみたいな恐竜なんでしょうね？

時間の経過とともに馬は進化したと考えるか、それともトカゲが進化したとみるべきか。

まあどうでもいいことですが。

第十話：礎（前書き）

今回はカルラ視点での話です。

とはいえ真面目な雰囲気を出すのにカルラ視点の一人称はいまいちだったので三人称で行きます。

……そして私は予約投稿を三日分ほど済ませてあるのですが、この話を間に挿入し忘れていたので今日は二話更新となりました。

マイルールで投稿初日と最終話を投稿する日は、一日二話投稿と決めておりますが、まだ最終回と言う訳ではありませんのでご安心を。

それではどうぞお楽しみ……ただければいいのですが。

第十話：礎

レワタウがシャクコポル族の村へ行くのを見送ったあと、カルラは父であるラルマニオヌ皇に会うために父の部屋へ向かう。

皇でありながらも華美な装飾を嫌うカルラの父、ラルマニオヌ皇は、調度品などにも実用的なものばかりを選ぶために他国の者を招く「謁見の間」以外は大国の王城というには驚くほどに質素なつくりをしている。

そんな部屋の中で、ラルマニオヌ皇は宰相と話し合っていた。刀と鎧を取り出し手入れに勤しんでいるがら。

「ん、カルラか。どうしたのだ？」

見ての通り俺は次の戦に備えて武具の手入れに忙しい。

この俺と互角に戦える者が敵として現れたのだ。

こちらにも全力の限りを尽くして戦うのが戦士としての責務、武具の手入れを怠って負けてしまつては相手にも悪いからな」

相変わらず豪快に笑うラルマニオヌ皇。

「カルラ様、私どもは今後の戦についての話し合いをしておりますゆえ、聖上へのご用件でしたらしばし御遠慮願いますか？」

こちらは対照的に無表情で語る宰相のゴウケン。

皇はまるで子供のような笑顔だが、本当に強者との戦いのみを求めているのだろう。

カルラは宰相を無視して父である皇に言う。

「お父様、その戦についてお話があります」

これから言う事はラルマニオヌ皇の機嫌を損ねることであり、娘であるカルラすら許されないことかもしれない。

だが言う。

「……お父様、どうかこの戦、シャクコポル族との話し合いの場を設けてみてはもらえないでしょうか？」

「……なんだと？」

「カルラ様!？」

カルラに顔を向けた皇は驚き、戸惑い、そして何よりも怒りの表

情が見てとれる。

それは皇が戦いのみを生き甲斐とし、戦いこそが自身の存在意義であるからだ。

それでも皇はさらに何かを言いたげな宰相を手で制し、言葉の続きを求める。

「カルラ、俺の『戦い』に口を挟むということは、それなりの覚悟があつてきたのか？

俺に対して戦を剣以外で納めるように口を出すことの愚かさを十分に分かった上で来たのか？

賢いお前のことだ、理由があつて来たのだろう」

「はい」

はつきりとカルラは答える。

「だが俺は戦のために生きているこの大国ラルマニオヌの皇だ。

訳くらは聞いてやるが俺は戦を止める気などないぞ。

それが俺であり、ギリヤギナ族であり、ラルマニオヌなのだからな」

はつきりとラルマニオヌ皇は返す。

それはカルラが幼い頃から見てきた父の威厳。

見る者に、目の前に立つことを後悔させるような猛々しい視線。

それを真正面から受け止めて尚、カルラは言った。

「この戦が間違っているからです」

確かにカルラの父であるラルマニオヌ皇は戦を好み、戦士として死すは誇りと考える男である。

戦での死は名誉なものであり、皇としてではなく、一人の戦士として、強者との戦いの末に死ぬことを望む男である。

だがカルラとしてその父に負けるような柔な決意でこの場に居る訳ではない。

信じる友と、互いに手を取り合える未来を作りたくてこの場に入るのだ。

「私はギリヤギナ族です。お父様も、この国を統治する大半の者がギリヤギナ族です。」

ですが私は、シャクコポル族との共存を望んでおります。

父上が一人の武士^{もののふ}として戦に死すを名誉な生き様と言うように、私にとって戦をしないことこそが私の生き様なのです」

「……それでお前は どうしたい？」

まさか、それだけで俺が戦を取りやめるとでも本気で思っているのか？」

「勿論そんなことは思っておりません。

お父様は私が娘だから、などという理由で己の信念を曲げるほど弱いお父様でないことは、娘である私が一番よく分かっております。しかしだからこそ、お父様に両種族の共存こそが誰もが望む未来であり、この戦を続ける愚かさ気付いてくれると思って言っているのです」

「この戦の愚かさ、だと？」

「はい」

カルラは言う。

この戦を続ければどちらが勝つにしろ、どちらかの種族は根絶やしとなると。

カルラは言う。

両種族が争うことは、この国の未来に新たに武士としての生き様もののふが出来る子が生まれてくる可能性を潰す行いであると。

カルラは言う。

ギリヤギナ族の中にも、共存を望んでいる声は父が思っているよりも多くいると。

カルラは言う。

自分の信じた友であるレワタウは、カルラを信じたから強くなれたと。

両種族が手を取り合う未来がどれほど人の心を強くするのかを。

そして信じている。

父であり、皇であるラルマニオヌ皇は、戦いとは何かを守るため、己の信念を貫き通す生き様であることを誰よりも分かっていると。

「なるほど……、お前の考えはよく分かったカルラ」

「で、では！」

「確かにお前の考えは俺にとって新鮮なものだ。

俺としたことが久しく見ぬ強者との戦いに心が躍り、未来というものを忘れておったかもしれんな。

戦とは、互いの信念のぶつかり合い。

それは何かを守りたいという心の強さが己の足を前に向け、手には剣を握らせる心。

両種族の共存など、この度のシャクコポル族の反乱が小さく見えてしまう大戦だな」

ニヤリと唇の端を歡喜に吊り上げるラルマニオヌ皇。

彼は良くも悪くも単純で、誰よりも平等だ。

皇が戦を楽しむのは、自分の信念の強さが相手を凌駕しているのを分かり易く感じさせてくれるからだ。

その在り方に先を見据えるという考えは、ほとんどない。刹那的で、目の前の相手に全力で向かうだけだ。

だからこそカルラの言葉に気づけた。

カルラの示す未来の、『共存』と言う名の「戦」の難しさに心躍らせた。

それはカルラの父が大国ラルマニオヌの皇だからである。

「ゴウケン、聞いての通り俺は戦をやめる。

直ちに全軍に告げよ。

少なくとも、カルラの言う俺達と共存を求める連中を相手に殺しはせん。

ならば一度話し合いの席を設けるのも悪くないだろう」

皇はこれまで黙って聞いていた宰相に告げる。

皇は楽しいのだ。

自分が考えていた未来とは別の可能性を提示してくれた娘と、その従者の少年が。

種族の違いを乗り越えて二人が固く結びついているのが分かるから、二人が強いのが分かる。

この先、共存という未来を選べば二人のような強者が出てくる可能性があるということが楽しいのだ。

父である自分を大きく超える次代を継いでくれるこの娘の存在が嬉しいのだ。

「……………」

「どうしたゴウケン。

戦よりも楽しい戦があるのだぞ。宰相のお前が動かないでどうする？

両種族の共存というのがここまで心躍らすものだったなどと、露ほども考えたことがなかった。

やはりカルラは俺の自慢の娘だ」

皇は単純であるが故に気づけなかった。

この国を共に支える味方を無条件に信じ過ぎていたがために。

カルラの提示した未来の難しさ、すなわち大戦がすでに始まっていたことに。

人の心の闇こそが最も凶悪なものであることに。

ドスッ

「お父様！！」

短く響く小さな音とともに皇の背に宰相が剣を突き立てる。

皇でありながら、上下関係など気にしない皇は気づけなかった。

戦に善悪を求めない皇は味方の善悪にも無頓着だったのだ。

「ゴ……ゴウケン、貴様俺を裏切るのか？」

「裏切る……と言えばそうなのでしょうね。

私はラルマニオヌのために生きていますが、聖上のやり方に賛同できないという意味では裏切らせてもらいます」

皇は背後から刺され、それは致命傷だ。もう助からない。

ゴウケンが次に狙いを定めたのは皇女であり、彼にとってこの戦いを止めようとする元凶のカルラだった。

「!？」

カルラに迫った刃は実際にカルラを貫くことはなかった。

皇がその剣を素手で掴むことで止めたのだ。

「頭でっかちかと思えば意外といい一撃じゃねえかゴウケン。それと悪いなカルラ……どうやらお前の言う大戦とやらはもう始まっていたのだな。」

俺としたことが浮足立って気づけなかった」

「お父様……」

「聖上、邪魔をしないでいただけますか？

私の筋書きでは、貴方はカルラ様にシャクコポル族との和平を申し出られ反対し、親子で殺し合う、という流れをすでに用意しておりますので。」

突然のことのように思われるかもしれませんが、私は常々このような機会をうかがっていたのですよ」

ゴウケンはこの日のために文官たちをその手中に収めていた。

強さこそが全てのギリヤギナ族だが、戦そのものを楽しむあまり、強さを誇示することには無頓着だった皇は皇女であるカルラが生まれてからますますシャクコポル族を卑下することが無くなっていた。

ギリヤギナ族にもカルラや皇に感化され、シャクコポル族だろうと強ければいいという考えも広まり、一部のギリヤギナ族には許せなかったのだ。

「強さ」を生まれ持った最強種族である自分達ギリヤギナ族がシャクコポル族などを人として見る事が。

宰相派とでも言えはいいのだろうか、シャクコポル族を根絶やしにすることで本当に弱きところがない最強の大国へしようと考えていた連中にあと一つ足りなかったものがあつた。

すなわちシャクコポル族を根絶やしにする大義だ。

些細なことでも良かったが自国の強さを示す最も効果的な理由さえあればいつでも戦えるように宰相派の者は備えていた。

それが今回の戦で好機と思っていたと言うのに、ラルマニオヌ皇は共存の道を選ぼうとしたのだ。

故にゴウケンはこの国の宰相として強硬な手段に出たのだ。

「俺は味方の心すら読めんとはな。本当に戦馬鹿さ……。」

……ゴウケン、一つ頼みがあるんだが聞いちゃくれねえか？

このまま俺は死ぬだろうが、カルラだけは今は殺さないでやってほしい」

「今は……ですか？」

「ああ、そうだ『今は』だ。

俺の志を汲んでカルラにはこの戦の結末を見せてやってほしい。

俺はカルラと、その従者であるシャクコポル族の少年が示した未来に懸けている。

だからこれも戦での死と、俺自身が死ぬことは覚悟できている。だが、お前がこれからどうするにしろ、カルラにはこの戦を最後

まで見てもらいたいのだ。

シャクコポル族を説得しているというレワタウが成功するのか、宰相のお前がギリヤギナ族を本当に掌握できるのか、カルラ自身がどのような死に方をするのか、俺の死を含めてこの戦の最後をカルラには見せてやってほしいのだ」

皇が最後に言う言葉は自分の命乞いではなく、ましてや娘であるカルラを救うように頼むものでもない。

カルラに自分の招いた事の結末を見させようというものだった。

それは自分の死すら「生き様」と考える皇の最後の言葉であった。

「それはシャクコポル族を私が根絶やしにした後にカルラ様を殺しても構わない、ということでしょうか？」

「ああ、カルラは覚悟を持ってこの場にいる。

信念を持って俺に信念をぶつけてきた。

ならば今更、命乞いなど無粋だろう？

だからカルラ……お前はお前の生き方を——信念を通して死ぬまで生きろ」

最後にカルラに向き直った皇は最後まで嬉しそうに笑って死んだ。最後まで一人の武人であり続けたラルマニオヌ皇は死んだのだ。

娘に未来を見せるために。

決して何物にも屈さない皇は死んだのだ。

「お父様……」

皇は分かっていたのだろう。

カルラからシャクコポル族との話し合いの場を設けるという考えに賛同した時点で、それが自分の最後の戦いになることが。

レワタウとカルラが協力すれば、元々争いの嫌いなシャクコポル族のことだ、話し合いの場には参加するだろうし、こちらが共存の意思を示せば過去を水に流すとまではいかないものの、今よりは歩み寄った国になるだろう。

奴隷としてのこれまでの行いは両種族にとって忘れられるようなものではないが、それでも今よりはずっと笑顔が増える国となる。

ギリヤギナも、シャクコポルも、すべての民が『共存』する未来という戦は時間がかかろうともカルラとレワタウは戦いぬいていくと信じた。

この国の皇として、未来を娘に託したならば、それが自分の最後の仕事になるとも分かっていた。

皇は自分がギリヤギナ族のこれまでの罪を全て背負って死ぬ気であつたのだ。

新しい時代の来訪を迎える悪しき過去の象徴として、自分が戦うよりも娘が向かっていく、これからの時代、『共存』という名の戦いを生き抜いていく生き様を迎えられるように。

それが少し早まっただけ。
こうしてラルマニオヌ皇は満足して死んだのだった。

第十話：礎（後書き）

「死に様」ではなく「生き様」。

満足して己の信念に則った死なら構わない！

そんな男らしさがラルマニオヌ皇から出せていればいいのですが。

最近資料として色々な国の歴史書なんかに手を出すようにして
いましていました、オスマン帝国にハマってきております。

というか歴史ものも書きたいジャンルですし、いっそのことオス
マン帝国の話でも書こうかな……。

第十一話：それぞれの思惑（前書き）

一人称だと視点変更するときに『○○side』と書くことがおいですけど、なんか雰囲気壊れそうなのでこの作品ではなるべく使いたくないですよ。

なので途中で視点変更入りますがあまり気にせず読んでください。それにしても会話文が長くなったな。もっと短く簡潔明瞭に書けるように精進せねば！

第十一話..それぞれの思惑

シャクコポル族の村でカルラの話聞いた俺は走り続けた。

わき目も振らず、ただひたすらに友のために。

王城では上へ下への大騒ぎとなり、誰もが慌ただしくしているが、そんな中、見知った少年が俺を待っていてくれた。

「デリ！ お前どうしてここに！？」

いや、それよりもカルラはどうなった！？」

「レワタウ兄さん！ 宰相お付きの兵たちが、姉上は自室にいた父上を殺害したあと、そのまま地下牢に捕えたと言われていますが僕には信じられません！」

姉上は宰相に罪をかぶせられたに違いありませんよ！！」

騒ぎの中、城へと駆け付けた俺を唯一出迎えてくれたのはデリホウライ。カルラの弟だった。

まだ幼いからか、他の多くのギリヤギナ族のようにシャクコポル族を嫌うことなく、カルラと同じくらいに俺のことを慕ってくれている。

そのためにデリも、カルラや俺と同じくシャクコポル族との共存を望んでいる。

「俺もカルラが自分の父親であるラルマニオヌ皇を殺すとは思えない……、少なくとも皇は、良くも悪くもギリヤギナ族らしいギリヤギナ族だからだ。」

シャクコポル族ながらも強さを示した俺を認めてくれていたし、カルラが殺さねばならないほど両種族による話し合いの席を拒むとも思えない」

俺がそうであるように、カルラは自分の夢のためなら自らが死ぬことすら厭わないだろう。

自分が死んでも皇の血筋には弟のデリがいる。

仮に自分が死んだとしても俺がデリの御側付きになって夢をかなえてくれることを期待している節もあったから、両種族の平和のためなら命を捨てる覚悟はあるのだろう。

だがそれを鑑みても今回の騒動は腑に落ちない。

俺も手合せしたからこそ分かるが、カルラの父、ラルマニオヌ皇は武人なのだ。

そんなカルラがラルマニオヌ皇を殺すとは思えない。

だが、この国の英雄でもあるラルマニオヌ皇が簡単に殺されるとも思えない。

おそらくは仲間を無条件に信じるラルマニオヌ皇はこの国の味方の誰かに殺され、その罪をカルラに着せることで同時に邪魔な二人

を始末しようという考えだろう。

それに例え、ラルマニオヌ皇を殺したのがカルラだというのが事実であれ嘘であれ、俺は夢を追う前に目の前で自らの命を散らそうとしている友を救うことを諦めるつもりは毛頭ないぞカルラ！

「姉上はきつと殺されてしまう……。

宰相はシャクコポル族との共存を常々唱えていた姉上を疎ましく思っていたんだ。

このままじゃ姉上は……姉上は……」

「泣くなデリ！

カルラは必ず俺が助けだす！

お前は部屋に籠っている」

俺が来るまでずっとこの不安と一人きりで戦っていたのだろう。安心させるように抱きしめたデリは俺の胸でしばらく泣いていたが、泣き疲れたのかそのまま眠ってしまった。

出来ればずっと付いていてやりたいが、そうもいかない。

近くを通った顔見知りの兵の一人に頼んでデリを自室に送り届けさせると俺はカルラを救うべく歩き始める。

「悪いなデリ。

もしも俺が失敗したらお前まで殺されてしまいかねない。

俺達が死んだ時に俺達の夢を継げるのはお前だけだからな」

この戦で俺が生き残ることができれば、デリが目を覚ますのは事が全て終わってからだろう。

それまでに片をつける。

カルラを助けなければ俺が俺でなくなってしまうからだ。

……少し寝ていたかもしれないわね。

両手首を枷によって壁に拘束すされながらも眠れるだなんてね。

お父様が殺され、自らも捕えられてしまったと言うのに。

でも私たちの夢はまだ途中。実現するためにも、戦いを続けるにも今出来ることをするのは間違いじゃない。

「お目覚めですかカルラ様？」

「……ゴウケン」

牢の前に立つのは父を殺したこの国の宰相、ゴウケン。

「あなたがシャクコポル族との共存などと馬鹿なことを考えなければこのような事をせずに済んだのですがね。

聖上も戦には乗り気でしたし、私も戦を指揮するこの国の宰相として、弱きシャクコポル族を根絶やしにしたかったのですが……」

何かしら考えているようなゴウケン。

「まあ、結果的に私が軍の指揮権を得ることに成功しましたし、カルラ様は自業自得とも言えるでしょうからここに居てこの戦の結末を見届けてください。

聖上の遺言でもありますし、この戦の結末を貴女が見届けるまでは貴女を殺しません」

「黙りなさい。シャクコポル族だって命がある。

それを踏みにじってまで得る繁栄になんの価値があるというの！
？」

堪え切れずに声が荒げてしまう。
だけどそれでも言いたかった。

お父様は皇である前に、一人の武人であった。

だから今回の反乱でシャクコポル族を滅ぼすのではなく、今一度奴隸身分であるシャクコポル族と話し合い、両種族の関係を立て直してほしいという私の願いも聞き入れられた。

未来を見据えて行動するならば、共存の道を選んだほうがずっと強い国を作ることが出来るから。

『共存』という名の戦の大きさに喜んでいた。

シャクコポル族でありながら、私の御側付きとして、武人としても素質を発揮するレワタウを知っていたからだと思う。

シャクコポル族にも強者となりうる素質を持った者がいるのなら、今の体制を見直す決意を持ってくれた。

それなのにこの男が……。

「聖上は皇としての素質を持っていなかったのだ。

ギリヤギナ族はこの最強種族としての誇りさえ持っていれば大陸全土を支配することさえ容易いというのに。

だから部下を無条件に信じるから私程度に殺される。

カルラ様もレワタウなぞという下賤の者を御側付きに任命するなど、とち狂った考えからして毒されております。

シャクコポル族は滅ぼさなければいけません！

そのため、僭越ながら私がこのたび新たな皇として、このラルマニオヌを支配させてもらうことにしました」

「そんなの無理よ。」

確かに父上と私が居なくなれば貴方は動きやすくなるでしょうけど、次の皇は血筋からいってデリになるはずですよ。

弟が貴方のような屑を皇にするはずないですわ」

「ですが、その次の皇であるデリホウライ様が死んでしまわれたらどうします？

文官が少ないこの国ならば、政を取り仕切ることが出来る者など私しかおりません。

確かにこのラルマニオヌ国の皇に求められる素質として『強さ』がありますが、文官の方達は皆、私のやり方に味方しているのですよ」

宰相のゴウケンは嫌らしい笑みを浮かべる。

つまり、こいつは私に罪を被せて殺し、お父様や私だけでなくデリまで殺そうというのか！

こんな男がこの国を……戦でシャクコポル族をどうするのか想像に容易い。

「……ギリヤギナ族が破滅の道を歩いていることに気づきませんか？
シャクコポル族を支配し、全てを支配し、その強さが歪みを生じさせて最期には崩壊するのが分かりませんか？」

「分かりませんね。全く、これっぽっちも。

奴隷を滅ぼすだけで、この国が滅びるとでも？

確かに、シャクコポル族が滅びたことで貴女の言う歪みが生じて崩壊する可能性はあるでしょう。

実際広い国土を誇るこの国はまだまだ手つかずの土地も多いですし、耕作する奴隷がいないと困るのもまた事実。

ですが国の崩壊など所詮は人為的なもの。

そして反乱を起こしたのもシャクコポル族。

そんな馬鹿な真似をするの連中なら出てくるたびに殺していけばいいでしょう？

そうすれば、いずれは完全なる平和な大国が一つ存在する世界の完成というわけですよ」

「それこそが奢り、強い者は自分を特別な存在と勘違いをする。

自分が特別だと思った者は弱者を支配する。

そしてその行為が悪だとすら気づけないから、誰にも救いようない悪に墮落する」

あんまりにも悔しくて、途中から涙を溢しながら私は言う。

私とレワタウの夢が、こんな奴に壊されるのが許せなくて、悔しくて、……誰も死なせたくないから。

このままではシャクコポル族はゴウケンの手によって血みどろの争いの末に滅ぼされる。

「あなたには父皇殺しの罪を背負ったまま死んでもらうことになりませんが恨まないでください。

これはすべてあなたが自分で招いたことですので。

ギリヤギナ族でありながら、その『強さ』を奴隷風情との関わりを持つただけに使うのはあなたの勝手ですが、私の『他を排斥する強さ』があなたの『共存を求める強さ』を上回っていただけなのですから。

まあ、せいぜいシャクコポル族が戦に勝つことを望むのですね。

少なくとも戦が終わるまでは貴女は死なせませんから。亡き聖上の言葉の通り」

そう言って地下牢を出ていくゴウケン。

見張りの者もすでにあの男のは以下なのだろう。

「レワタウ……」

出来ることならレワタウだけでもいい、逃げ伸びてほしい。

そう考えたところで私は何も考えられなくなってしまった。

夢も希望もなくした私の心は絶望に取り込まれてしまったのだから。

ゴウケンとは自分が馬鹿なことをしているという自覚はあった。

この国の宰相とはいえ、弱い自分が支配したところでこの戦以降、ラルマニオヌ国を支配し続けることが出来ると本気で思っている訳ではない。

「それでも……若い者に期待をしたくなるのは何故なのでしょうね……。」

何故だか私は自分が負けることを望んでいる気がします。

ですが私に出来るのはただ滅ぼすだけ。

何者も寄せ付けない強さを得ることが平和だと自分で決めたのですからね……。」

宰相のゴウケン、彼もまた夢を追い、夢に破れ、それでも夢を捨てきれない男でもあった。

第十一話：それぞれの思惑（後書き）

『熱さ』を……もつと『熱さ』を……！！ ひたすらに熱く！！！！
最高に面白いライトノベル『カオスレギオン』の熱さははこんな
もんじゃない！！！！！！

それはさておき、宰相の名前は「嫌らしさとはなんぞ？」と考えた時に真っ先に思い浮かんだ『風来のシレン』の「ケンゴウ」というモンスターから付けました。

でもこれを逆にとすると武器の「剛剣マンジカブラ」のイメージしなくなってしまう不思議。

そういえば現在気分です中までプロットを書いている私の二作目の続編に予定している作品の主人公たちは『風来のシレン』シリーズのキャラの名前使っていないんですね。

前作では嫌なキャラとしてクロムアーマーの名前を、最後に味方にした敵キャラにつけましたが、今回は敵のまま屠るつもりです。

まあ、宰相にもそれなりの事情はあるわけですし、自分で殺した皇の言葉を守って戦が終わるまではカルラを生かしておいてますからね。

この作品ではゲーム『ファントムブレイブ』のように、完全な悪はいないということが表現できればよいのですが。

まあ、原作のノセシェチカ国の皇、カンホルダリ（ギリヤギナ族）はいかにもな悪役でしたが。
彼もあなるだけの理由があったのかもしれませんが。

この作品で出すかどうかは分かりませんが、死に方がユニークで
したから割と好きな敵キャラなんですけどねw

第十二話：差し出す手（前書き）

たまにはギャグが書きたい……。

でもこの作品が佳境かつ、最後までまだ書きあがっていないので『ダークソウル』の方にあまり時間は使えないし……。

この作品の前に7作目として投稿を予定していた自分のギャグ作品（現在三話執筆済みの未投稿作品）を読んで笑えました。やはり次回作はギャグになりそうです。

来月にはこの8作目と7作目を終えて9作目を始められればと思います。

最近出来た目標『投稿作品100作突破』

第十二話：差し出す手

デリと別れたあと、俺が一番に向かったのは自分の部屋だ。

戦わずに済ませられればそれでよかったが、どうやらそうも言っていないようだ。

せめていつ戦いになってもいいように武器と装備を整えようと思ったのだ。

ラルマニオヌ皇もカルラも居ない、この状況でシャクコポリ族である俺は争いに自ら介入していくのだからな。

それに遅かれ早かれ、皇の暗殺というのがカルラの手によるものではなく、シャクコポリ族の奴隸身分からの脱却を快く思わない連中の仕業だとすれば、カルラを地下牢に閉じ込めた後にすることは俺を生かしておく理由はないはずだ。

だと言うのに俺は油断をしていた。

一国も早くカルラを救いださねば、という思いから自分も命を狙われているという現実を見逃していたのだ。

「ッ!？」

城内の自室に飛び込んだ俺を出迎えたのは手痛い一撃だった。

咄嗟に腕を前に突き出して体を庇い、素早く背後に飛びのいたお

かげで怪我自体は大したことない。

皇が死んで皆が忙^{せわ}しく動いている状況で、そこまでの兵をシャクコポル族一人に差し向けれれる余裕はないのだろうから実力的には大したことはない敵なのだろう。

だが、それでも俺は攻撃を受けてしまった。

「へへっ、お前を殺して俺は宰相に取り入られる。

シャクコポル族という弱さをこの国から根絶やしにするのは俺達ギリヤギナ族の義務でもあるのだ」

嫌らしく笑ってくる刺客はそのまま追撃にかかったが、その存在に気づいた俺が二度も斬られるはずがない。

相手の剣を素手で往^いなし、そのまま拳をガラ空きになった鳩尾に叩き込む。

「があああゝ！」

やはり暗殺者としての腕は大したことない。

刺客は、その一撃だけで武器を取り落として怯^{おそ}んでしまった。

そして俺はその隙を逃すつもりはない。

刺客の手首を掴み、そのまま組み伏せて身動きをとれなくする。

ギリヤギナ族のようだが動きが、てんでなっちゃいない。

「おい、お前は何で俺を狙ったんだ？」

先ほどの発言からこの刺客の依頼主も俺を殺す理由も分かっているが、こいつ自身の口から聞きたかったのだ。

憎しみの理由を、俺に対する殺意を。

「誰に言われて俺を殺しにきた？」

「お、俺はただ宰相に媚を売りたくて来ただけなんだ。シャクコポル族なら簡単に暗殺出来るって言われてよ。なあ、命だけは助けてくれよ！！」

すでにギリヤギナ族であるという誇りなどないのか、シャクコポル族である俺に必死で命乞いをする男。

こんな奴が俺を殺そうとしたのか？

こんな奴が俺とカルラの理想を邪魔するのか？

そんな気持ちではらわたが煮えくりかえる思いだった。

俺に対する怒りや憎しみなら受け止める。

怒りや憎しみによる復讐の戦いなら受け入れる。

だが、自分の殺意ではない他者の殺意に乗っかって人を殺そうと

する者に容赦など来ん！

「いいか！ お前が付けた俺の傷をってみろ！

赤く染まったこの腕をってみろ！

俺もお前らも、同じ赤い血が流れているんだぞ！」

そう言って突きだした俺の腕からは先ほどの男から受けた袖口が血で赤く染まっている。

「命の価値を強さで……種族で決めるな！

誰も死にたくはないし争いなんて求めちゃいない！

生きるのに必死な俺たちを一度でもいいからまともに見てみやがれ！！！！」

男から剣を奪い、振り下ろしたい感情を抑え、その柄で殴りつける。

それだけだ。決して殺しはしない。

刺客の男が気を失ったというのもあるが、俺を信じて待ってくれているカルラは俺が汚れるのを望んでいない。

それに、……ここで俺がこいつを殺すことを望んでいないのは他でもない俺自身でもあるのだ。

カルラの友である今の俺は出来ることなら誰も殺したくはない。俺の手は剣を握むためではないという思いがあるからだ。

「俺達の夢の邪魔をする連中は、シャクコポル族が弱いから、自分達がギリヤギナ族だから、そんな理由なんだろう……。」

この刺客も、俺がこいつの想像通りに弱いシャクコポル族だったら、楽しんで殺したんだろうな」

刺客との死闘で散らかってしまった室内。

少し前まではカルラと共に夢を語り合っていたと言うのにな……。

シャクコポル族を認めてくれるギリヤギナ族に出会い過ぎたからだろう。

全てのギリヤギナ族が話し合えばわかると、俺は心の中で勘違いしていたのかもしれない。

「それでも俺は殺したくない。この手を差し伸べたい。

剣ではなく、友として手を握り合いたい……しかし、それでもやはり戦うしかないのか……。

宰相が今回の事件の首謀者のようだが、戦い以外で解決する術はないのだろうか？」

疑問は当然。だが今はそんな状況ではない。

気持ちは切り替え、俺はいつか捨てるための剣を手にとると、夢が夢で終わらないことを証明するために走り出す。

俺とカルラで共に見たあの眩しいばかりの理想を求めて。

デリに聞いた話ではカルラは地下牢に閉じ込められているはずだ。
そこの警備も厳重だろう。

「しかし地下牢か……」。

それならば方法はないでもない。

戦うのも支配するのも、その牢を警備をするのも人なのだからな」

……

………

「よおレワタウ」

「久し振り……でもないな。ブナガ」

上の騒ぎなど、まるで関係ないかのように、のんびりした口調で
牢を護るのはギリヤギナ族の兵士、ブナガだ。

ブナガは兵の中では同じ若い連中の兄貴分ということだが、シャ
クコポリ族の俺に対しても奴隷としては見ずに気さくに話しかけて
くれるので、よく話もするいい奴だ。

ギリヤギナ族ではあるが、こいつに限らず、俺と年の近いギリヤ

ギナ族はシャクコポル族を毛嫌いしている者は少ない。

それはカルラがこの国の未来を語っているために、シャクコポル族と手を組むことに嫌悪感を抱く者が少ないからだろう。

カルラの父、ラルマニオヌ皇も真の武人であるため、地位も権力も関係なく強き者は何よりも価値があるという考えだったのでその考えに憧れた者も多いそうだが。

「確かに俺と会うのは久し振りではないわな。

だが、レワタウ。

お前、チイのことは最近避けてるんじゃないのか？」

「俺もカルラの御側付きだからな。

分かるとは思うが仕事が多いんだよ」

ちなみにチイというのはブナガの妹だ。

以前ブナガの家に行った時に会って以来えらく気に入られたのだ。

「まっ、冗談はここまでだ。

そんなことよりも、そのカルラ様に会いに来たんだろ？

上はなんだかゴタゴタしているみたいだが、カルラ様もお前も間違ったことする訳ねーしな。

ほれ、一番奥の牢にいるから会ってやってくれよ」

暗い牢を指差すブナガ。

カルラと出会う前ならば、このギリヤギナ族の友人とも理解し合うことなく終わっていたのだろうと思うとカルラの存在の大きさを改めて実感する。

まあ、そうはいってもまだ始まってもない訳だし、カルラの側に俺がいて、初めて始まるんだよな。

俺はこんな状況でも、剣奴のときよりも『生きている』と感じているんだ。

「ありがとよ、ブナガ」

この先にいるカルラに会うために。

俺の個々Rは常に前を向いている。

宰相の一番の失敗は、半端な刺客を差し向けたことでも、皇殺しの罪をカルラに押しつけたことでもない。

俺やカルラに仲間がいらないと思っっているところだ。

ギリヤギナ族も上の老害どもこそシャクコポル族を奴隷として見る考えが根強いが、今この城の若い兵たち、はカルラや俺の影響でシャクコポル族を奴隷としてよりも、ともにラルマニオヌという国に住む民としての認識が強い。

俺たちは敵しかいない訳でも、暗闇の中をさまよっているわけでも孤立無援ってわけじゃない。

目的地を見据えて手の届く場所にいるんだ！

むしろ今のラルマニオヌでは宰相を含む上層部の連中こそが老害と考える連中も少なくはない。

シャクコポル族はそれを知る機会がなかったためにこの戦を起したが、それが悪いとは言わない。

これから変えていけばいいだけのことなのだから。

俺はブナガとの会話を打ち切って地下牢の奥、カルラのいる場所まで向かう。

「カルラ」

他に地下牢に人の気配はないが、声を小さくして言う。

「レワタウ」

俺の声に友が返事をする。

「貴方、村へ帰ってシャクコポル族を説得しているんじゃないのかしら？」

もしかして交渉の場を設けるのに失敗したとか？」

「シャクコポル族なら俺を信じてギリヤギナ族と一度交渉の場に立つ約束を取り付けてきたさ。」

それよりカルラ、お前は父皇殺しの犯人として捕まっているようだが、お前をここに捕えたのも聖上を殺したのも宰相で間違いないか？」

「ええ、その通りよ。」

宰相のゴウケンがお父様を殺したわ。

元々シャクコポル族が嫌いだったみたいだけど、今回のことを機にシャクコポル族を殲滅しようとしていたみたいね。

私がお父様とシャクコポル族との関係について一度話し合う場を設けるように言ったことが許せなかったのね」

「典型的なギリヤギナ族ということだろう。」

むしろギリヤギナ族としては、カルラや俺と親しい若い連中の方がこの国では異端だと思うぞ。

いや、過去のこの国では、と言ったほうがいいか」

俺達二人を応援してくれる仲間は確かにいるのだから。

村の皆は俺を信じてギリヤギナ族と交渉することを約束してくれ
たし、俺たちが異端だと言うのなら、その考えをこれから変えてい
くだけのことだ。

誰だって平和を求めているんだ。

その平和を手に入れる方法が力による闘争の末の平和か、話し合

いによりにより緩やかに歩む平和かの違いがあるだけだ。

過程こそ違うだけで何も違わない。

それに俺は、宰相らギリヤギナ族が自らの『強さ』に自信を持ち、支配による平和を目指すのを悪いとは言わない。

だから争いが悪いことも言わない。

本当に争いによって平和な国を支配出来るのならば。

「弱者を支配するのはある意味弱者を守ることにもつながる。

だが、それで自分が特別な存在だと思っではいけない。なぜなら

……」

俺はカルラを見る。

カルラも俺を見る。

「特別な存在なんていないのだから」

そう、支配するのはいいだろう。

弱者と強者で役割を分けるのもいいだろう。

しかし、その事に不満を持つ者が現れるようでは支配者は支配者とは言えない。

強さも弱さも、善も悪も、全てを本当に支配出来るのならそれは

平和な国と言えるかもしれないが、それがありえないからこそ人は自分を特別視してはいけないのだ。

それこそその人が持つ役割を壊す行為であり、自分を壊すことに繋がるからだ。

だから理解し合う心を持たねばならない。

俺達は誰一人として特別ではない代わりに、誰もが心を持っているのだから。

「さあ、行こうカルラ。

倒そうぜ！ この国の悪を！

誰一人として特別なんじゃない、だからこそ誰一人として欠けてはいけない大切なこの国の民を失わないために。

俺達の夢が夢で終わらないことを証明するために！」

「ええ、レワタウ。

私は特別ではない。

貴方も特別ではない。

誰もがこの愛すべきラルマニオヌ国の民であるなら、その犠牲を少しでも減らすために！」

キィ————ン

地下牢に響く鋭い音。

これまで幾度となく俺の命を救ってきた愛剣のショーテルが地下牢の壁を切り裂く。

そして俺は鉄格子のない状況でカルラに手を差し伸べる。

この手の掴むべき温もりのために。

「ふふ、あの時とは逆ね。

剣奴だった貴方が私と同じ夢を見始めた時と」

「俺がこの手に掴むのは、カルラの手と決めている。

かつてカルラが、暗い地下牢で夢も希望もなかった俺の手を取ってくれたように、今度は俺がカルラをこの暗闇から連れ出そう。

誰もが剣を捨て、お互いの手を取り合う事の出来る国にするために」

「そして、それがいつか終わるとしても、人が人として生きる喜びを感じられる国に変えるために」

どちらからともなく、俺達の顔には笑みが浮かぶ。

そうして握り合う俺達の手は、必ずこの国に希望を掴み取ることが出来ると信じている。

この暗い地下牢にも、確かに希望の光は差し込んだ。

人が人であろうとするならば、為し得ないことなど無いのだから。

第十二話：差し出す手（後書き）

かつて自分が差し伸べてもらったように、今度はレワタウがカル
ラに手を差し伸べる。

すでに孤立無援ではない二人は剣を捨ててゐるための戦いに乗り出したのだった。

第十三話：若き戦士たちの決意（前書き）

今回は序盤は三人称にてシャクコポル族の村メイン。

やはり一人称だと主人公の熱さは出せるかもしれませんが、これまで書いてきた作風によってギャグ寄りにしたい欲求に駆られるんですよね。

まあ、そんな感じですがお楽しみください。

第十三話…若き戦士たちの決意

大国ラルマニオ又は国が始まって以来の大混乱を極めていた。

それもそのはず、これまで奴隷として扱ってきたシャクコポル族が反旗を翻したのだから。

だがそれはレワタウとカルラの尽力により、一旦は回避された。

ギリヤギナ族だけでなく、シャクコポル族も絶対に正しいとは言えない。

話し合いの場を設けるべきだと諭されたからだ。

そして話はシャクコポル族の村へと戻る。

レワタウが城に戻ってからシャクコポル族の村ではこんな話し合いがあった。

「村長、我らにギリヤギナ族との対等な話し合いの席を設けようとしたカルラ皇女が捕えられているというのに我らが何もしないのではいけないのではないのでしょうか？」

一人のシャクコポル族の少年、一族の中では抜きん出た強さを持つレワタウ。

その彼が信じ、彼と同じ夢を見ているカルラ皇女が捕えられたと

いう情報に、村長宅に集まった者たちが話し合っているのだ。

「すでに一度は死を覚悟した我ら。

レワタウやカルラ皇女のような、誰もが当たり前に幸せになれる未来を見つめている若者のために、この命を燃やしつくすのは惜しくはありませんぞ！」

シャクコポル族の男衆は元々この戦に命を捨てる気でいた。

勝ち負けに関係なく、すべては未来を担う自分たちの子や孫のために。

だがそれでも家族を愛し、老いて死すまで共に居たいと思っていたのも事実。

それゆえに誰もが一番望む形の未来を提示したレワタウと、その友であるカルラ皇女を救うためならば死を覚悟出来る。

それは共存という素晴らしき未来を示した二人に命を預けたようなものだからだ。

死にたくない、だが彼らのためならば自らの命を犠牲にすることすら厭わぬ、二律背反するようだがどちらもシャクコポル族の総意であるのだ。

「……ふむ、確かにのう。

儂もカルラ皇女には会^おうたことはないが……レワタウがあそこま

で言うのじゃ。

何故か信じてみたくなるのう」

幾度も先ほどのレワタウの言葉が思い出される。

未来を担う子供たちの中にはレワタウも含まれているし、すでにシャクコ波尔族の中にはギリヤギナ族も未来に含めて考えている。

レワタウの理想、誰もが幸せな未来にはそんな誰もが笑い合える可能性が含まれているのだ。

「ゲンジマル殿」

村長の視線の先には先ほどから黙考を続けていたエヴェンクルガ族の英雄がいる。

「……うむ」

ゲンジマルもこの戦に迷いがあった。

武人としての『誇り』、戦を起こす『義』、守るべき『家族』。

それらを背負っても、何度も戦を経験してきたゲンジマルは決定的に何かが足りないと感じていた。

レワタウの言葉。ゲンジマルはそれを繰り返し心にしみこませていた。

「某は……、これまで幾つもの戦場を経験しているが今回の戦には迷いを感じていた。

何故か分かるか？」

それまでずっと黙っていたゲンジマルの発現に集まっていた一同は静まり返る。

「先ほどレワタウは言った。

ギリヤギナ族の誰もが悪なのではない、互いを知ることが出来ないこの境遇こそが悪なのだ。

それは某の考を見抜き、某の迷いは全てが悪ではないからと気付かせる言葉だった」

少し前までは剣奴としてこの中の誰よりも過酷な境遇だったレワタウが心から信じていった言葉はゲンジマルにも届いている。

「確かにギリヤギナ族はシャクコポル族を奴隷として扱い、侵略を繰り返し、戦うことしかない。

だがレワタウは言ったのだ。本当にそれだけなのだろうか？ と。それに気づいたのは剣奴だったレワタウなのだ」

そこで一旦口を閉ざし、時間を置く。

皆それぞれにその言葉の意味を深く考える。

「某は気付かされた。

ギリヤギナ族が犯した最大の罪は無知であることを恥と想わないところだと。

だから戦を仕掛けた。死を覚悟した。

しかし、その戦を止めるために話し合いの機会をくださったのはレワタウの友、ギリヤギナ族のカルラ皇女様はなのだ」

それぞれに思うこともあるのだろう。

だがそれでもゲンジマルの言葉は静かながらその場の全員の心に届くようにゆっくりと言葉を紡ぐ。

すでにゲンジマルの心に迷いはないのだから。

「ならば迷うこともあるまい！

その皇女様が、シャクコポル族と対等の関係を築こうとして捕えられたというのなら、我らが立ちあがらずしてどうする！

改めて某は宣言しよう。義は我らにあると！！！！」

エヴェンクルガ族の力を借りて、たとえ自分が死んでも子や孫のために未来を作ろう。ギリヤギナ族を滅ぼそう。

そんな考えで凝り固まっていた先ほどまでの心はすでにレワタウが打ち砕いている。

ゲンジマルの言葉が皆の心に届くのはそう難しいことではなかった。

「そうじゃのう……。」

ゲンジマル殿、改めてこの場にいてくださり感謝いたす。

儂らはこの度の戦に新たな義を見出した。

ギリヤギナ族を滅ぼすのではなく、友として、手を取り合える関係を築く。

そのために尽力してこそ、儂らの子どもたちに語るのも恥ずかしくない平和な未来と言えるはずじゃ」

その時全員の心が一つになった。

守るための戦い、その守る対象にギリヤギナ族と共存できる未来も含まれたのだ。

「ゆくぞ！ 皆の者！！」

我らがカルラ皇女と同胞レワタウのためにもここで立ち上がらなければ今度こそ完全に誇りを失ってしまう。

尊厳のない生き方とは決別した我らの底力を見せる時は今じゃ！

！！」

シヤクコポル族とは言え、誇りはある。

レワタウが目覚めさせた一族の誇りを、村長も思い出していた。

かつての自分というものを。

物事の善悪をきちんと主張する正しさを持っていた心を。

これは己の心を――未来を守るための戦いなのだから。

村長の言葉が響いた時、村長宅の裏手には二人の少年の姿があった。

「……聞いたかハウエンクア」

「おいおいヒエン。」

僕のこの立派な耳は飾りじゃない。

ちゃんと聞こえていたさ」

この村の誰よりも、尤も近くでレワタウと言葉を交わしていたヒエンとハウエンクアである。

二人はまだ幼いという理由からこの戦には参加させてもらっていないが、それでも物心ついた時からレワタウを慕い、ひたすらに剣の腕を磨いてきている。

幼いからという理由で戦に参加できない理由に納得できるはずがないというものだろう。

そうして何か自分たちに出来ることを探しているうちに村長らの話を盗み聞きしていたのだ。

だが結果としては二人の予想以上の話が聞けたことになる。

「以前兄さんが言っていた皇女様が囚われたそうだな。
勿論このあとどうすればいいのか分かるな？」

「ふっ、愚問だよヒエン。」

僕はこの日のために腕を磨いてきたのさ。

これまで溜まった怒りをぶつけるべき相手が出てきたというのに立ち上がらないようでは男じゃないさ」

二人は腰に提げたナイフを抜く。

まだちゃんとした剣を持たせてはもらっていないが、日常生活にも役に立つということから唯一普段からの所持を許された彼らの武器だ。

「某はエヴェンクルガの英雄ゲンジマルの孫にして、シャクコポル族の未来の英雄レワタウ兄さんの弟だ。

これより自分の誇りにかけて、レワタウ兄さんの助けとなるよう行動することを誓おう」

「じゃあ僕はレワタウ兄さんとカルラ皇女様の目指す両種族共存の未来を信じ、この命を懸けることを誓おう。

いつの日か分かり合える日が来ると信じて耐えてきたレワタウ兄さんと皇女様の夢を壊すような悪漢を観過ごすのは僕自身の義に反するからね。

シャクコポル族にも義はあるんだ。ギリヤギナ族にもあるように」

そうして村長宅から離れ、自らの足で王都へと走り出す。

これを見た者は、子どもの決意などたかが知れていると思う者もいるだろう。

いや、むしろ幼い二人が出ていくのを止めるべきだ。

だが止められない。二人は真剣なのだ。

それだけ心から信じているのだ。

ここで止まったら心が死んでしまうのだから。

自分たちの兄レワタウと、その兄が信じるこの国の皇女の言葉と夢。

誰もが当たり前前に幸せで、当たり前前に平和に暮らせる未来、なんと素晴らしいものか。

この国の平和を愛するごく普通の一般の民ならば二人の少年の気持が理解できるだろう。

だから二人は走り出す。すでに二人の夢でもある『共存』という

未来を掴むために。

誰もが幸せな未来を望むことこそが『生きる』ことになるのだから。

第十三話：若き戦士たちの決意（後書き）

さあ、ハウエンクアの活躍はこれからだ！ 原作のような悪いだけの小物はもう終わりだ！

原作突入時にはアルルウにときめき、誰に対しても優しく、上からの命令を「いやいや、幾らなんでもその拡大解釈はおかしいだろ！！！！w」なツツコミを入れなくてもいいキャラにしなければ！

原作の主人公にして他国の皇であるハクオロを連れてこいと言われてトウスクル国に攻め入った時、

「別に生きたまま連れてこいとは言われてないし、ちょっとくらい壊れてもいいよねえ」

と言いながらハクオロを殺そうとしていたのには大爆笑でしたww

でもそこを変えてしまっただけはハウエンクアのファンは増えないよ
うな……。

第十四話：開戦（前書き）

カルラは今現在は原作ほど強くはないです。

ラルマニオヌが滅ぼされた時は素手で追手の兵を殴り飛ばしていましたが、強さ的にはまだ弱くはない程度ですね。

第十四話…開戦

牢を抜けた俺とカルラは、まずギリヤギナ族に対して宰相の企みを暴き、両種族の共存に向けて、シャクコポル族と一緒に動くことである。

ただギリヤギナ族の説得というのは、もはや不可能だろう。

カルラを慕う者は確かにいるし、俺がカルラの御側付きになっても着実に共存に興味を示す者は増えてきている。

だからこの時点で宰相の側について、シャクコポル族との戦いを望んでいる連中との話し合いというのは難しいのだ。

それはいま城にいるギリヤギナ族の兵たちは、宰相の提示する未来に自らの意思で参加した者たちで構成されているからだ。

あるいは口で、あるいは金で、あるいは戦う場を提供する形で。そうやって兵たちを動かしているのかもしれないが、結局のところ宰相に付いた者は皆自分の意思で戦いを求めている。

すでに城は宰相派によって動いているのだ。

この国の「弱さ」の象徴であるシャクコポル族を、この戦を節目に根絶やしにし、ギリヤギナ族の種族としての強さを他国にも響き渡らせるやり方こそ「強さ」であるという考えで。

それが悪いとは言わない。

一般的には悪なのだろうが、それでも今のこの国では悪ではない。

それを裁くべき国が率先してそのような支配を行っているのならば、弱者を踏みつける行為を正当化しているのならば、それは悪ではない。

だから俺達がすべきは、その行いが破滅を招く行為であり、悪であると示すこと。

「共存」が難しくとも、あえてその難しいことに挑むことこそが「強さ」であり、最終的な幸せな未来を作っていくことに繋がると示せばいいのだ。

そのためにも、まずすべきは共存の未来を共に歩んでくれるであろうシヤクコポル族との合流だ。

城にいる共存派の仲間は軟禁されているかもしれないが、それなりに数は多い。

すぐに殺されることもあるまい。

そもそも共存の道を選んだギリヤギナ族の仲間たちは、同族との戦いも全て考えた上で協力を望んでいる。

一度しかない生の中で、『生きている』という実感を一番感じさせる、カルラが提示する為し難いがための幸福を求める戦に自らの意思で参戦している。

良くも悪くもギリヤギナ族の仲間達にとって、死は戦を恐れる理由ですらないのだ。

「それじゃ、俺は何事もなかったかのうちにこの牢を守っているからお前らはさっさと逃げ出せよ」

「お前が牢番で助かったよブナガ。
お前も適当なところで逃げろよ。」

俺達は一度シャクコポル族の仲間と合流したら、宰相とこの国を正すために戻ってくる。

誰も死なせたくはないが、少なくともこの城は戦場となるだろう」

牢番のブナガは番を続けることでカルラが逃げ出したことをごまかし続けるというが、それも長くは続かないだろう。

カルラが言うには、この戦が終わるまで宰相はカルラを殺すつもりはないと言ったらしいが、それを信じたところでここから逃げ出すのを黙って見逃すとも思えない。

何を考えているのかは分からないが宰相は宰相でこれまで長きに渡って、その知力によってギリヤギナ族の兵たちを纏めてきたのだから。

「おっと……早速お出ましのようだな」

牢を後にし、秘密裏に城から抜け出そうとしていた俺たちだが、やはり追手が来た。

そう簡単に抜け出せるとは思っていなかったが、こうも簡単に見つかるとはな……。

「通してくれ、と言っても無駄なのだろう？」

「黙れシャクコポル族が。」

俺達はお前たちを根絶やしにして真の強国となるのだ！」

刺客の数は5人。

その誰もが宰相の言う「強き国」という理想にのまれているのが分かる。

「貴方達、『共存』こそが最も幸福な道だと気づけませんの？
そこまでして戦を望むんですの？」

「言っても無駄だカルラ。」

こいつらは典型的なギリヤギナ族だ。

『戦う』ことではなく、『支配』すること、『虐げる』ことこそが強さだと思っている連中だ。

善悪抜きにして自分たちの意思で動いている連中はそう簡単には説得できない」

俺達を取り囲むようにする敵兵五人。

俺一人なら何とかならんもないが、今はカルラを連れている。

殺さずに無傷のまま村へ帰るといふのは厳しいかもしれない……。

「かかれえ！」

刺客の一人の合図とともに他の四人が飛びかかる。

俺は左手でカルラの手を掴んだまま正面の一人から攻撃をかいくぐると同時にその手首にシヨーテルを斬りつける。

すでに体の一部として変幻自在に動くシヨーテルによる斬撃は軌道も読みにくい。

「ぐおっ」

そうして不意を突いて斬りつけた男を蹴り飛ばし、囲みに出来た穴から抜け出すと振り返りざまにもう一人を斬りつける。

「はあっ！」

さらに攻撃は続ける二撃三撃と繰り返し、確実に仕留めていく。

だが俺はここで油断をした。

五人の刺客を全員斬り伏せたことで油断をしてしまった。

「かかったなアホが！」

物影から六人目が現れたのだ。

「ッ！」

防御は間に合わない。

そう悟った俺はせめてカルラだけでも守ろうと、己が身を盾にした。

「レワタウ！」

カルラが叫ぶ。

時間の進みが遅く感じるが、それでも確実に刺客の剣が俺を貫こうとしているのが分かる。

だがその剣が俺を貫くことはなかった。

「ぐぬあ……」

六人目の男は俺ではない別の人物によって背後から斬り伏せられていた。

「レワタウ兄さんが死んだら僕はいたい誰を目標に生きていけばいいと言うんですか？」

「某たちが兄さんだけ命を張っているのに村で大人しくなんてできませんからね」

「ハウエンクア！？ それにヒエンも！？
お前たちどうしてここに……」

そこにいたのはシャクコポル族の村に居るはずの俺の弟分、ヒエンとハウエンクアだった。

幼い二人はこの戦にも参加せずに避難をしていたはずだ。

「言ったじゃないですか。
僕はレワタウ兄さんを信じているって」

「某もレワタウ兄さんが信じるカルラ皇女様を信じることにしただけですよ。

そちらが皇女様ですね。
はじめましてシャクコポル族にしてエヴェンクルガの英雄ゲンジマルの孫、ヒエンと申します」

「僕はハウエンクア。

レワタウ兄さんがあまりにも幸せそうに貴女のことを語るもんだからどんな人かと思えば、僕らと変わらない普通の人だったみたいですね。

でもだからこそ、貴女を信じるレワタウ兄さんの気持ちが分かる気がしますよ」

二人は以前俺が言ったことを考えていてくれたのだろう。

二人の弟たちは俺が信じるカルラを信じることに決めたようだ。

そして戦うことから逃げないと決めたのだろう。

「レワタウからは『自慢の弟たちがいる』とは聞いていましたが随分と腕が立ちますわね。

私はこの国の皇女カルラウアツウレイ。

あなた達と共存を望み、同じラルマニオヌ国に住む民の一人にすぎない女ですわ」

二人を信じさせた俺が信じる友。

そのカルラは見る者にそれと分かるだけの信頼感を感じさせる笑みで挨拶を返す。

「それよりも兄さん。

村の大人たちはカルラ様にこそ会ってはいないけど、兄さんや共存を求めるギリヤギナ族がいることを信じてこっちに向かっているから村に戻る必要はないよ。

僕らはこっさり先行させてもらったけど、もうすぐ近くまで来ているんだ」

「おい馬鹿ハウエンクア！

某たちがこっさり来たのは内緒だろう」

「ハハッ、まあ俺のことなら気にするなよ。

お前らには死んでほしくはないが自分の意思でこの場にいるのだろうか？

ならばその志を止めるのは無粋と言うものだ」

俺がこれまでしてきたことは無駄じゃない。

弟たちがこうして信じてくれているように俺も信じられる。

以前は抑え込むだけで精いっぱいだった俺の中の黒い感情が友を得ただけで変わった。

胸の内で熱く燃え上がる感情は誰もが当たり前に持っているもの。

それこそがシャクコポル族の仲間たちの心からも憎しみを減じさせたのだろう。

そう考えているともう一人、新たな声が聞こえた。

「その通りじゃよ、レワタウ。
儂らはお前さんらを信じておる」

見れば村長が村の仲間たちを率いて来ていた。

その手に持つのは多くの剣。

しかしその目に宿る光は恨みによる黒い感情ではない。希望の光だ。

「お初にお目にかかりますカルラウアツウレイ皇女。

このたび、儂らはシャクコポル族としてではなく、この場に居ります共存の未来を求める者として参りました」

口調こそ穏やかながら、村長はカルラを試すような目で見る。

本当に信頼に足る人物なのか、自分の目で見ているのだろう。

「私ごとき小娘の理想を信じていただきありがとうございます。

私たちギリヤギナ族も争いを望むばかりの者でないのです。

どうか共に手を取り合える未来を作っていきましょう」

試すのは最初だけ、それだけで人の心の全てが分かるものではないが、心からの言葉は時間や言葉数に影響されたりはしない。

カルラの言葉は心からの言葉であり、村長や一族の仲間たちに届くには時間なんて必要なかった。

「ふむ、まあ挨拶はこのへんでいいじゃろう。

元々カルラウアツウレイ皇女様の人柄についてはレワタウから聞いて信じておったからのう。

それと、村で待っておるように言っておいたのにここまで来おったヒエンとハウエンクアにはあとで説教じゃが……」

その一言に顔色を変えるヒエンとハウエンクア。

やはり黙って村から出てきてしまったのは不味いだろう。

「この状況で村に返すのも忍びないしのう。

儂らが全力で守ればよい。

二人とも戦士としてこの場におけるのじゃからな」

「村長……」

「ふ、ふん、僕の実力ならば大人にだって引けを取らないさ。

村長こそ、もうすぐ初孫が生まれるんだから無理をしないようにした方がいいんじゃない？」

二人は村に送り返されることを気にしていたようだが、村長も一

人の男だ。

それぞれに心を汲んだのだろう。

そしてハウエンクアはいつも通り。

「調子に乗る出ない。」

儂らは誰も死にたくはないが、それでもこの場にいるのは信じられる理想を提示してくれたカルラウアツウレイ皇女と共に、この国を巣喰うための戦いを始めようぞ！」

カルラはレワタウの幸せそうな笑顔を見て思った。

彼は嘘は言わないし、どの言葉も自然と口から出ただけの自分の心に素直な言葉なのだろう。

レワタウの言葉を聞いていたカルラは少し前の父の言葉を思い出した。

自分を裏切った宰相に命乞いをするでもなく、自分に全てを見届けさせるように頼んだ父の心。

何を思って父が自分を助けたのか、自分がこの先どうすべきなのか。

父が殺され、牢に閉じ込められてからずっと考えていたカルラの中の悩みが消えたような気がした。

目の前で自分を信じてついてきてくれるシャクコポル族の仲間。

そう、仲間なのだ。

ギリヤギナ族とシャクコポル族、二つの種族が争いの末に掴むものを考える。

確かに問題が多いこの状況だが、あらゆる考えが頭をよぎって尚、カルラは今この状況を『楽しい』と感じていた。

心から信じることが出来る友。その友を慕う仲間たち。

困難の大きさ、自分の理想を実現したあとの維持、それら悪い可能性を全て考えた上で未来が明るいと思えるのはカルラの手を掴む大切な友の温もりがあるからだろう。

「カルラ、どうかしたのか？」

黙ったままのカルラを気にしてか声をかけるレワタウ。

「いいえ、何でもないですわ」

ほんの少し、気付かれない程度に頬を染め、笑うカルラ。

自分をいつでも守ってくれる存在。

大切な――何者にも代えがたい存在。

レワタウから伝わってくる暖かさがカルラに孤独を感じさせないでくれるのだ。

それはカルラの父であるラルマニオヌ皇がいつも周りに見せていたもの。

全てをありのままに受け入れ、どんな困難も乗り越えられると信じさせる大きな背中。

「（宰相の野望は止める。誰も死なせない）」

そんな決意を胸に秘めたまま、カルラは誰に言うでもなく自分の手を握る友の手を、さらに強く握り返す。

ギリヤギナもシャクコポルも、どちらもカルラの愛するラルマニオヌ国の民に違いなのだから。

第十四話：開戦（後書き）

私は『ジョジョの奇妙な冒険』は第二部が一番好きなんですよ。

なんか外国では第三部からしか出版されていなかったりしますけど、それでも第二部が一番だと思うのですよ！

（他の部が嫌いな訳じゃありませんよ）

なので戦士というものに特別な感情を持っています。

『魔界戦記ディスガイア』シリーズでは、どの得意武器もそれぞれの専門職に負ける「女戦士」を最初に作ってから最後までずっと育て続けるくらい戦士好きですし。

……それとPSPゲーム『初音ミク -Project DIVA- extend』購入&ノーマルモードでの全曲クリアしましたー♪

そのおかげでストックは尽きているのに最終話はおろか、明日予定している話もまだ書き上がっていないのですが。

ハハハハハ……、でもこういう逆境って燃えるので何としても投稿して見せますよ。

ラストの筋書きはすでに出来ていますし、次話も10000文字くらいは執筆中かつ、次次話が9割書いていますので、最終話がどれだけ文字数増えるかは分かりませんが、少なく見積もって8000文字くらい書けば終わりそうですし。

あと三話なら上手く纏まらないなんてことはないでしょう。最後まで毎日更新です！

予定では明後日の二話同時更新で完結出来れば、と思います。

でも次話と、次次話は裏表な感じの話なんですよね。
無理をしても明日三話更新にするべきか……しかし職業柄、休
日ほど忙しいから休めないんですね。

まあ、最後までお楽しみいただけるよう頑張ります！

気合い、根性、努力！の三本柱パワー全開！！！！

第十五話：剣で知る心（前書き）

最後の戦いということで、私の一作目以来のかなりの長い話となりました。

ふう、しかし流石は私。

さすがに最終話まで四話（キャラ設定含む）書くのは疲れましたが何だかんだで今日で最終回となります。

では最後の戦い、お楽しみください！

第十五話…剣で知る心

レワタウたちがシャクコポル族と一緒にあってラルマニオヌ王城へ再び来ると、宰相派の兵で城は固められていた。

おそらくカルラを慕う共存派のギリヤギナ族たちは軟禁状態といったところだろう。

「ブナガ達は無事でいてくれればいいのだがな……」

「腐ってもギリヤギナ族ですもの、同族を手にかけるような真似はそうそうしないでしよう。」

「ゴウケンでさえ私をすぐには殺さなかったんですもの。少なくともこの戦が終わるまでは無事なはずよ」

「しかしそうになると、ブナガのような共存を望んでいる者を牢番にしていたことが疑問に感じる。」

「まるでカルラが逃げ出すのを承知していたかのような行動だ」

「……それも含めてゴウケンには直接問いただしたいことが沢山ありますわね。」

「宰相としてシャクコポル族を滅ぼそうしているには、その行動に矛盾が多いですもの」

そう言いながら、眼前の敵を見る。

これほどまでに大勢がシャクコポリ族との共存を拒んでいるとは、正直今更ながら俺達の夢の障害の大きさに気付かされるな。

「あら、レワタウ。

もしかして連中の数に驚いていますの？」

「まあな、俺が城で会った連中は俺に対しても偏見を持たない良い奴が多かったからな。

シャクコポリ族を根絶やしにしても構わないという宰相の考えに付き従う兵が予想より多かったのに素直に驚いただけさ」

村の仲間たちも今更ながら敵の戦力に緊張の色を隠せないでいる。

「数ではこちらにも負けていないのだろうが、シャクコポリとギリヤギナの実力差を埋めるにはせめて倍は欲しいところだな」

「でも無いものねだりは出来ないし、仕方ないわね。

この場合はやはり連中の頭である宰相を討つのがいいでしょうね」

城に入るための門は北と南に二か所。

敵はどちらにも兵を配置してあるが、それはすなわち兵の半数し

か一度に当たってこないということにもなる。

こちらは相手が一人でも、確実に二人一組であたるようにすれば消耗を抑えられるはず。

少なくとも俺とカルラが宰相を捕えるまでは保つだろう。

「村長、俺とカルラは宰相に一直線に向かう。

正面の敵を任せていいだろうか？」

「任せろ……とは言い難いがなんとか時間を稼いでみよう。

レワタウは儂らが時間を稼ぐ間に敵の頭である宰相を討ってくれ」

そう言うのと村長は剣を抜き放ち、一族に宣言する。

「儂らシャクコポル族はカルラウアツウレイ皇女と同胞であるレワタウのために血路を開くことに徹する！

よいか、この戦はあらゆるものを守るための戦じゃ！

決して死ぬな！

そして生き延びるのじゃ！」

一族を鼓舞する村長の言葉。

それは生きるための戦いで、生き残るために最も大切なものをそれぞれに思い出させる言葉であった。

そしてシャクコポルとギリヤギナ、二種族の戦は共存と滅びを懸

けて始まった。

……

……

……

「シャクコポル族を根絶やしにしろ！
誰一人として生かしておくな！！！」

名も知らぬギリヤギナ族の兵が高々と宣言しながら手に剣を持ち、
シャクコポル族に襲いかかる。

俺も先陣を駆け、自らの剣を振りかぶって敵兵を次々と斬り伏せていく。

「無理に殺す必要はない！
守りを固めて必ず二人一組で当たれ！！！」

実力的にはシャクコポル族はギリヤギナ族には勝てない。

だから無理して攻め込むよりも相手を戦闘不能に弱らせるだけでいい。

俺は剣を持つ手とは別に、もう一方の手でカルラの手をしつかりと掴み取る。

俺が俺でいるために、決してカルラを殺させないために。

「レワタウ！」

お前は城内に行け！

某が引きつけておく」

ゲンジマル様も言葉と同時に剣を振り、多くのギリヤギナ兵を仕留めていた。

「すみません。それでは俺達は宰相の元に行きます」

「ゲンジマル殿、御武運を」

兵たちを引き留めるのはゲンジマル様とシャクコポル族の仲間たち。

犠牲を少なくするには最速で進み宰相を潰すことだと決めてはいたものの、やはり同胞を残していくのは歯痒い思いがある。

功成る前に何か他に手段はあったのではないかと。

カルラも、会ったばかりのゲンジマル様やシャクコポル族の仲間

に頼りきるのは心苦しいのかもしれない。

だが戦っている皆がその目に決意を宿してこの場に入る。

俺達は進み続けなければいけないのだ。

「……行っただか」

ゲンジマルは咲を行く自らの希望を守るためにこの場に敵を引き留める。

幼き日より剣を教えた孫同然のレワタウ。

そしてそのレワタウと志を同じくする皇女。

いまゲンジマルは未来を作っていく若者のために戦っている。

この事が嬉しくて堪らないのだ。

「某はエヴェンクルガ族のゲンジマル。

義によってこの戦に参じた。

未来を担う若者を殺すというのならば某を殺してからにするのだ」

名乗りを上げてギリヤギナ兵に突撃するゲンジマル。

誰一人としてその動きを捉えることは出来ず、次々と斬り伏せられ、後続としてくるシャクコポル族たちによって討ち漏らしなく倒されていく。

「誰もが望む平和の邪魔をする者に容赦するほど某の剣は甘くはないぞ！」

この場で闘志を見せる者は死を覚悟せよ！」

ゲンジマルは決して止まらず、その剣を握り続ける。

レワタウの理想——剣を捨てる未来が来るのならば、人を殺すために剣を振るのはこれが最後だと自分でも思うからだ。

平和な世に武の英雄などは不要。

ゲンジマルが剣の腕を磨いていたのは、ただ己を鍛えるためだった。

誰かを斬り伏せ、殺すことを目的に強くなったわけではない。

レワタウが、カルラが、二人が理想とする未来が迎えられたのならば、己自身の心と戦う戦士に戻るのも悪くない。

その想いがゲンジマルに最後の剣を振らせるのだった。

すべては剣を捨てた平和な世のために。

城に入った俺とカルラは、宰相派の兵に会うたびに戦闘となつてはいるが、連中はまるで意思疎通が出来ていない兵ばかりだった。

「どうなってるんだ？」

兵たちの統率がまるで出来ていない。

宰相が兵を送らせているにしては稚拙すぎる」

「おかしいですわね。

幾らなんでもまるで仲違いをするように我先に斬りかかってきますわね」

襲ってくる兵たちは連携などまるで考えず、独断行動の末に動いているかのようだ。

宰相は知力によってこの国を支配しようとしていたはず。

その宰相がこんな戦をしている理由がまるで見当がつかない。

「はあっ！」

しかし、そうは言っても目の前からはかなりの数の兵が襲いかかってくるのは事実。

ギリヤギナ族の兵は誰もが平均以上に強い。

だが、これほどまでにこちらが戦いやすく、連携をしない攻め方をしてくれるのであれば、個人の強さも数の脅威も単純にレワタウの上に行かねばまず勝てない。

そうして斬り伏せながら宰相の元を目指す。

一歩進むごとに二人の心は襲い来るギリヤギナ兵と違い、繋がりが強くなっていくのを感じる。

カルラの手を掴む俺の左手が熱いくらいに熱を持ち、互いの鼓動が痛いほどに激しく高鳴る。

それが心地いいと思うんだ。

目の前のギリヤギナ兵は誰もが我先にと飛びかかってくるから、この繋がりの温もりは分からないのだろう。

だが俺は、心から信じられる友が側にいると言うだけで幸せだ！

城の最後、宰相の部屋の前にいた兵も切り捨てると中に入る。

「おや、もう来ましたか……」

中にいるのは宰相一人だけ。
兵をどこかに隠しているのか？

「……ああ、この部屋には兵はおりません。
私一人です。」

城の中からここまで来れたと言うことは、私に従う兵は皆やられたと思ってください」

「……ゴウケン、貴方は何を考えているのかしら？」

カルラが聞く。

率直な質問。何故宰相はこうもやる気のない戦をするのか？

俺でさえ分かる。まるで負けるために戦をしているかのようだ。

「……そうですね。」

では、私を倒した未来を仮定しましょう。

ラルマニオヌの皇となったカルラ様が、両種族の共存する未来が成ったとします。

ですがギリヤギナ族にもシャクコポル族にも互いを憎しみ合う心は少なからず残ったままになりますよ。

それについてはどうするおつもりですか？」

「そんな事は百も承知だ。」

綺麗事と言われるだろうし、実現が何よりも難しいのも分かっている。

だが憎しみの対象を消すような平和よりも、たとえ争いが起きていつか滅びるにしろ、『生きる』という喜びを感じることが出来る国というのは、あらゆる感情や思想、憎しみすら飲みこめる度量があってこそだ！」

俺は終わらない幸福を求めている訳じゃない。

俺やカルラの死後に独裁をする皇や、謀反を企む将が現れるかもしれない。

それでも奴隷だった俺に希望という夢をくれたカルラの理想——『生きる喜び』を感じさせる国へとしたいだけだ。

「レワタウの言う通り、私達が求めるのは終わりなく平和な国じゃない。

少なくとも『今』のこの国の大勢の民が生きる喜びを感じ、互いに手を取り合える国にするために戦っていますわ。

死ぬのも殺されるのも滅ぼされるのも終わるのも、全て覚悟の上で未来へ繋がっていくものを作るために立ち上がったのですわ」

カルラも語る、俺達二人の理想を。

幸せとは、人それぞれに形が決まっていけないものだ。

その沢山の幸せを強制的に一つの形に統一することは断じて幸せ

なんかではない！

すべてを受け入れ、誰もが争わずとも済むようにする。

それが俺たちの理想、俺達の夢。

作りたい未来ってのは結局のところ両種族の共存する未来の基盤だ。

自分達が残したその基盤が永遠に続かないことなんて承知しているし、俺達が生きている内に崩壊する可能性だってある。

だが信じている。

これから皇となるカルラを。

今を生きる幸せを精一杯感じられる国にするために戦っている仲間たちを。

シャクコポル族もギリヤギナ族も関係なく、誰もが幸せに生きる国にすることが可能であると。

「……そうですか」

宰相はそう言うと言を抜く。

その表情こそひどく穏やかなものであるため異様な雰囲気があるが。

それでも宰相は笑っている。

「ではその理想を阻む最後の敵として貴方達の前に立ちふさがりましょう。

剣奴レワタウ。ラルマニオヌの宰相としてお相手願いましょう」

「……分かった」

未だ真意は見えないが、宰相は剣を交えることで語ろうと言うのだろう。

言葉は不要、そんな心の声が聞こえてくるようだった。

「シャクコポル族にしてギリヤギナ族のカルラの友、レワタウだ」

「ギリヤギナ族にしてラルマニオヌの宰相、ゴウケンです」

名乗りと共に俺も剣を抜き、構える。

「勝負！」

キン

勝負は一瞬。

宰相は剣の腕がないと聞いていたが、その剣筋はかなりの腕である。としか言いようがない。

交わした剣から感じる気迫には信念を持っているのが感じられた。並々ならぬ気迫の剣だった。

そして、自ら俺の剣を受け入れたのも分かった。

「や、やはり私ではギリヤギナ族という生まれに関係なく貴方には勝てませんか……」

「答えろゴウケン！」

お前は俺の剣をわざと受けたのか!？」

俺の剣がゴウケンを切り裂く一瞬、殺すのではなく相手の剣を弾くことを目的に斬りかかった。

それは避けようと思わなくとも当たるはずのない一撃だったというのに、それを敢えてくらったのだ。

「それは気のせいです。

私は殺す気でしたし殺される気なんてなかった。私が死ぬのは私自身の夢に破れて死ぬのですよ」

「ならば死ぬ前に答えなさい！
貴方の夢はなんなのですか！？」

気づけばゴウケンに詰め寄るカルラ。

傷口から血を流し、座り込むゴウケンを睨みながら問いたです。

「ギリヤギナ族のみによる支配を目指していたのは本当ですよ、カルラ様。

ですが貴女の理想である共存という未来を私も悪くないと思っていたのも事実」

「ならば何故！？」

「ですがそれが実現出来ないのですよ。
少なくとも私はその未来を見ることが出来ない。
私が宰相であり、聖上が存在している限り」

ゴウケンは言う。

この状況で言う言葉に嘘などないだろう。

「カルラ様や、剣奴のレワタウは気づけなかったかもしれませんが、
私が殺した聖上は誰よりも『強さ』に対して平等でした。
ですがそれは強さに対してのみ。

聖上の性格的に『弱き者』であるシャクコポル族を虐げるとまでは行かないでしょうが、それでも『強気者』を特別視する。それは両種族の關係に歪みを生むでしょう」

致命傷のゴウケンの体から溢れる血は留まる事を知らない。

だがそれでもこうして生きているのはカルラと俺に自分の心を伝えるため。

ゴウケンの真実、理想、それは一体なんなのか。

「そうして歪みが生じてしまえばこの国は終わりです。

私は自分の経験からシャクコポルとギリヤギナ、この二種族が手を取り合う未来などありえないと思っていましたが、それでも信じなくなりました。

だからカルラ皇女の理想のために行動したにすぎません。

私が死ぬのは貴女の理想が私のような旧時代的な理想を上回っただけのことですから」

「どうして……、どうして私にそれを言わなかったのですか!？」

ゴウケン！ 結局のところ貴方も私たちと同じ夢を見ていたと言うことでしょう!？」

それがなぜそんな生き方しかできないのですか!？」

「言ったでしょう、私は自分の夢に破れて死ぬのです。

シャクコポル族を根絶やしにするという考えも、私が勝つのなら

ば実行するつもりでしたし、貴女方がこの戦で負けるようなら私はこれまで通り一人の宰相として国とともに死すのも厭わなかったのですよ」

「ならば何故兵を自ら指揮しなかった!？」

俺はお前と剣を交えて感じた。

お前は負けるために戦っていたとしか思えない!」

誰よりも剣を交えた俺だからこそ分かる。

ゴウケンとは口では死ぬ気はなかったといいながらも、最初から死ぬ気で戦っていた。

「剣だからこそ分かることもある……、しかし剣では分からないこともある。」

剣奴のレワタウ、今の貴方にはまだ分からないでしょう。

いや……カルラ様がいるのならば一生知る必要はないのでしょうね。

私は一人のギリヤギナ族として、この国の宰相として自身の夢に破れた結果として死ぬのです」

最後までその真意は明かさないと言うのだろうか。

「もう一度……最後に聞かせてください。」

カルラ様、そして剣奴のレワタウ。

貴方たちはその子どものような誰もが手を取り合う理想が現実になると本当に思えますか？」

魂を燃やしての問い。

だがこの質問に対する俺たちの答えは変わらない。

「当たり前だ。

俺がカルラに救われたように、必ずこの国は変えられる。

子どもはいつかは大人になるんだからな。

俺がカルラの側にいる限り、この夢は誰にも邪魔させない」

「私も信じている。

レワタウが信じる私自身を——この国の未来を。

そしていつの日か共存の未来が終わるとしても、人が最も優れているところは『変わっていく』ことなのだから」

俺もカルラも子どもだ。

だが、それでも信念に嘘偽りはない。

夢を夢で終わらせるつもりもない。

心からの本心をゴウケンに伝える。

「……そうですか。」

どうやら私の夢も悪くはなかったということでしょうね。

剣奴レワタウ、貴方と交えた剣を冥土の土産にあの世でこの国の未来を見させてもらいますよ……」

その言葉を最後にゴウケンは息を引き取った。

シャクコポル族を根絶やしにしようとし、最後まで敵であり続け、それでもカルラと俺の理想を羨ましげに見ていた男は死んだ。

「カルラ……」

「不思議なものですわね。私は彼の死が悲しく思うのよ。」

誰もが理想とする国を目指した時点で自分の死すら恐れなかった私が、ゴウケンの死を悲しむのよ」

「俺もそうさ……。」

ゴウケンは誰よりも真っ直ぐだった。

そこに信念があったから俺は戦い、剣を交えた。

それが悲しくもある」

だがこれで戦は終わる。

宰相の真意はいまだに分からないところもあるが、兵たちもカルラが新たな皇として即位すれば問題はあるにしろ今の争いには終止

符を打てる。

「さあ、行こうカルラ。

戦を終えるために、仲間たちの元に」

「……そうね」

宰相を背後に仲間の元へと歩き出す。

そして心の中で静かに別れを告げる。

「必ず未来を掴む」という決意と共に……。

第十五話：剣で知る心（後書き）

ラルマニオヌの王城って籠城戦とか考えてなさそうな造りな気がします。

誰でも来い！ってな感じで門も二か所くらいありそうな気がするんですよ。

そもそも敵を待つよりも自ら攻め込む印象がありますし。

さて、宰相の真意ですが、それは次話となります。

彼は滅びこそが救いという、よくあるゲームのラスボスの発想を持っていたわけですが、その思考に至って尚、カルラやレワタウの理想に惹かれてもいたという話。

次話は朝6時。最終話はお昼の12時にキャラ設定と同時に投稿予定となっております。

第十六話：同じ夢を見ていた者（前書き）

今回の話は前話の補足でもありますので同日更新出来て良かったです。

理由さえあれば悪が許されるとは言いませんが、少なくとも完全な悪は居ないという話です。

第十六話：同じ夢を見ていた者

大国ラルマニオヌは代々、皇が武人の国である。

そのために、政が得意まじう得意な皇はいつの時代もいなかった。

しかし戦上手というのも皇の条件かもしれないが、国として存在していく上で政をこなすことのできる者がいなければいけない。

皇が血筋で決まるように、国内の政を一手に引き受ける宰相も、皇のように代々血筋で受け継がれる役職でもあった。

これはそんなラルマニオヌの宰相、ゴウケンの過去の話である。

「……それにしても、お前はギリヤギナ族の癖に体が弱すぎるぞゴウケン。」

奴隸であるシャクコポル族の方がまだ体力がある」

泥に塗れて汚れた少年と、少年を呆れたように見つめる今代の宰相である少年の父。

少年は名をゴウケンと言い、代々ここラルマニオヌ国で宰相を務

めてきた一族の子だ。

一族はラルマニオヌの宰相を務める一族だけあって、ギリヤギナ族ではあるものの、飛びぬけて優秀な頭脳を持つ者を出すことでこの国を支えてきた。

もって尤も、そのためか身体的には虚弱な者が多いのだが。

ゴウケンの父も武の才こそ持たぬ、戦士としては凡庸な男だが、その頭の良さは他国にも知られるほどの男だ。

それでも少年ゴウケンよりは『強い』。それなりに剣も振れる。

それなのにゴウケンは一族の中でも輪をかけて生まれつき身体が弱く、剣を振れば重みでふらついてしまうほどに『弱い』存在だった。

宰相の一族は、政のみに専念するために武人として戦場に出るところこそ禁じられているものの、「ギリヤギナ族は最強の種族である」という『常識』があるため、嗜み程度には代々の宰相も行ってきた。

それすらも出来ないゴウケンを呆れた目で見る父親も、それを止める者がいないこの状況も、この国では当たり前前の光景なのだ。

「お前は次代の宰相となるべき男なのだ。

ギリヤギナ族として最低限の『強さ』も持たないお前が宰相になつては他の者に示しがつかんのだぞ！」

奴隸であるシャクコポル族は『弱い』ことがこの国では常識であり、そのシャクコポル族よりも弱いゴウケン是人として見られない。身に纏う服も、元は上等な品だったのだろうが、長い間着替えていないので汚れが染みついて、みすばらしくなっている。

ゴウケンの父は駄目な息子をそのままに、その場を去る。

きっと次代の宰相は一族の外戚から選ばなくてはならないかもしれない、などと考えているのだろう。

「……くそっ」

父親が去ったことを確認して、小さく吐き捨てるようにつぶやくゴウケン。

彼は努力をしていないわけではない。
むしろ人一倍努力をしているのだ。

誰よりも早くに起きて剣を振り、将来宰相になるために学問も真面目にする。

弱い身体に自ら鞭打って、眠気も疲れも感じさせずに努力をする。
だが努力している姿を決して見せようとはしない。

ゴウケンの努力は、自分を愛してくれない父親を「自分が努力す

る姿を見せる」程度で感心させようと考えているわけではないのだから。

「いつかは僕が宰相になってこの国を変えてやる！

ギリヤギナ族だから『強い』とか、シャクコポル族だから『弱い』とか、そんなんじゃない。

本当の『強さ』ってのを僕が証明してやるんだ！！」

結果を出すことで認めさせたかった。

そんなゴウケン少年の幼き日の夢は無垢なものだったのだろう。

ゴウケンの求める結果は、『強さ』や『弱さ』を、差別する理由から無くしたいという子ども心に抱いた小さいながらも立派な夢だったのだろう。

そしてその小さな夢をただ一人応援してくれる人物もいた。

「ゴウケン様、その夢はご立派ですが、あまり大きな声え言わない方がいいですよ。

私のようなシャクコポル族はともかく、ギリヤギナ族の方に聞かれでもしたら大変なことになります」

ゴウケンよりも簡素な衣服を纏った若いシャクコポル族の女性。

手に持った水筒をゴウケンに手渡し、体に付いた泥を払う。

「そうだったねアイ。

いつか君を奴隷身分から解放してあげるためにも、僕はまだ目をつけられるわけにはいかないんだ」

ゴウケンがアイと呼ぶ女性とは、ゴウケンが生まれた時に、父親が連れてきたシャクコポリ族の奴隷だ。

ゴウケンが生まれた時から心の支えとなってくれていた女性。

そんな彼女を、奴隷と主人という関係ながらも、ゴウケンは心から信頼していた。

すべては彼女のような奴隷身分にいるシャクコポリ族を助けるため。

ゴウケンが己を鍛えることに妥協をしないのには、そういった理由もあったのだ。

アイのために強くなる。この国を変えてみせる。

そんな青臭い理想を掲げながらも、照れることなく語っていた当時のゴウケン少年の言葉は本心であり、彼の理想であった。

そうして目標を持つゴウケンは誰よりも勉学に励み、剣の努力も続け、才能はないながらも少しずつその実力を評価されるようになっていった。

それから数年が経ち、ゴウケンが宰相の役職を父から受け継ぐ日も近づいてきていた。

ラルマニオヌに住む全ての民を幸せにしたい。

ギリヤギナ族とシャクコポール族、どちらも関係なく幸せに生きてほしい。

そんな期待を持っていたゴウケンの夢は叶うことなく、その理想を大きく決るような事件が起きたのだ。

「……なんで？」

その日、ゴウケンは父に呼ばれて部屋に向かっていた。

ゴウケンの父は少し前から病のために、そう長く無いと医者に言われており、ゴウケンに家督を正式に譲り渡すためだろうと思っていた。

それゆえに、すでに青年となっていたゴウケンは考えもしなかった突然すぎる父の死を。

「ゴウケン様、もう来られたのですか。

できれば貴方のお父上の死体をもっと無残に切り分けてから見せつけようと思っていたのですがね」

剣を手に持ち、その身を血で染めるのはゴウケンの側仕えであっ

たアイであった。

「何でアイが父上を？」

もしかして父が君に何かしたのかい？」

その血で濡れた恐ろしげな姿とは裏腹に、仮面のように整った笑顔を見せるアイ。

「その質問には『はい』と答えるべきでしょうね。

私は貴方を騙していました。

全ては貴方のお父上を殺すため、私の両親の復讐をするため」

彼女は語る。

自分の生い立ちを。

シャクコポル族の彼女の両親はゴウケンの父によって殺され、そのまま奴隷としてゴウケンの家に連れられてからはずっと復讐の機会を窺っていた。

一番の復讐は自分の恨みを絶やさないこと。

そのために宰相の息子であるゴウケンをも自分と同じ目に合わせようと計画していた。

「……アイの恨みは、僕が宰相になってシャクコポル族とギリヤギ

ナ族の共存の未来を作るという約束、それを一緒に作っていくことよりも大きかったのかい？」

「ええ、所詮は奴隷と主人。

シャクコポルとギリヤギナの両種族が共存だなんて、出来るはずがないじゃないですか。

私の目的は恨みを残すこと。

自分の意思で、貴方のお父上を殺したのですから何の後悔もありませんし、これ以上生きるつもりありません」

そう言ってアイは自らの喉に剣を突き立てた。

止める間もなくあっけなく死んだ。

最後に何かを言っていたようだがゴウケンには聞き取れなかった。

それでも彼女が何を言ったのかは分かった。

「さようなら」と。

「ギリヤギナとシャクコポル……この二種族の共存は出来ないのだろうか……」

その後やってきた別の使用人に、アイによって父が殺されたことを説明したゴウケンはその日の内に次の宰相となることが決まった。

奴隸であるシャクコポリ族に殺されたというのがギリヤギナ族にとって恥ということもあり、ゴウケンの父は病の悪化によって死んだと表向けは説明されたのだ。

ゴウケンも実際に父の死と信用する友の言葉がなければそれを信じていたのだろうが、ゴウケンが一番間近で見しまった。

復讐のみを糧に生きてきた自分の友のあっけない最後を。

「はは……、結局は僕の夢なんて誰からも信じられない夢物語でしかないんだな」

自室にて両種族の在り方について考えていたゴウケンはその日から大きく変わった。

父が死んで宰相の仕事を引き継ぐこととなってからは、これまで以上に学問に打ち込み、才はなくとも剣の稽古にも熱を入れた。

そしてカルラの父であるラルマニオヌ皇を支えることで宰相としての実績を確立していた。

考え方を大きく変えながらも。

すべては争いをなくすために。

シャクコポリ族が減びてしまえばこんな辛い思いはしなくても済むという考えに変わっていた。

友であったアイの恨みは確実にゴウケンの中にゴウケン自身の恨みとして根付いていた。

しかしそれから何年も時が流れ、一人のシャクコポル族の少年と、その少年に手を差し伸べたギリヤギナ族の皇女によって考えが揺らいだ。

「共に手を取り合う未来のために」

二人の姿にかつての自分を思い出す。

誰もが幸せで誰もが笑い合い、誰もが愛し合う者と共にいられる理想の国。

そんな理想を思い出す。

だからだろうか、シャクコポル族を根絶やしにするという究極的な方法で国を平定させようとしていたゴウケンだが、共存というかつての自分が諦めた未来を真剣に追い求める二人の若者に期待していた。

身分も種族も超えた二人の関係が、かつて自分が目指していた理想と同じだったから。

そうして最後まで二人と志を同じくしながらも、それを認めず敵として死を選んだ男、ゴウケン。

彼はラルマニオヌ国にとって一番最初に共存の未来を選び、その夢に破れながらも誰よりも夢を捨てきれない男だったのだ。

第十六話：同じ夢を見ていた者（後書き）

心の変化が上手く賭けていればよいのですが、その辺はいつか別の作品にでも活かせればと思います。

とりあえず次話が最終話ですね。

いろいろありましたがあと一話、お付き合いください。

投稿はお昼に予定しております。

第17話：剣を捨てた手に抱むもの（前書き）

『熱い物語』が書きたいという思いから始めたこの作品ですが、今日この話にて完結。

毎日更新だったのであまり長くはなかったですが、今回も楽しく書くことができました♪

第17話：剣を捨てた手に掴むもの

宰相の死を知らせるために城の外に出た俺達を出迎えてくれたのは、すでに兵を捕縛し終えたゲンジマル様たちだった。

「どうやら、そちらも終わったようだな」

「ゲンジマル様……」

確かに片は付いた。

宰相は死に、城は村の仲間たちとゲンジマル様によって制圧されている。

これでこの国はカルラの手によって変わっていくだろうし、時間さえかければ俺たちだけでなくゴウケンも目指していたものも見えてくるはずだ。

宰相であるゴウケンは一人の戦士として戦い、そして死んだのだ。

この戦だけでなく、これまでの両種族の関係は多くの恨みばかりを残し、その結果死んで逝った者も多い。

ならばせめて、死んだ者が恥じない国にしていくこそが俺達の進むべき道だろう。

「終わりましたわ。

宰相のゴウケンは一人の戦士として戦い、そして死にました。

この国はこれから変わっていくはずです。

いえ、私を変えて見せます！」

カルラは迷いなくはっきりと告げる。

そして遅れてやってくる仲間たちの歓声。

その中には軟禁されていたのだろうカルラの考えに賛同していた
ギリヤギナ族の仲間の姿もある。

「（ああ、そうだった。この光景が見たかったんだ）」

不意に思いだしたように胸にこみ上げる感情。

剣奴だった俺に、カルラ見せてくれた理想をここにいる皆が見て
いる。

それが嬉しいのだ。

俺の隣には俺の迷いを常に受け止め、共に悩んでくれる友がいる。

シャクコポル族もギリヤギナ族も関係ない。

誰もがこのラルマニオヌの民であり、幸せをその手に掴もうと立
ち上がった者たちなのだ。

「カルラ……」

「胸を張りなさいレワタウ。

私達は生き残ったのです。

いつの日か私たちの理想が終わり、再び争いによって国が消えるとしても、人が人として生きていくことの素晴らしさを伝えていく義務があるのですから。

まだまだすることはありますわよ」

「はは、カルラには敵わないな。

だが確かに……俺達の夢はここからが本番なんだよな」

誰もが種族に関係なく手を取り合い、幸せを謳歌する国。

そんな国の歴史がようやく始まろうとしているのだ。

「そして私の隣には貴方が、貴方の隣には私がいる」

「心と体、両方で剣を握るしか出来なかった俺に未来を見せてくれた友はカルラ」

「何の力もない皇女の夢物語に付き合って、それを実現してくれた

友の名はレワタウ」

どちらからともなく差し出し合う手をお互いに掴み取る。

「お前と出会えてよかったよカルラ。

未来を見せてくれてありがとう」

「私の方こそ感謝しますわレワタウ。

未来を共に実現してもらえたんですもの」

笑顔。

俺が惹かれた彼女の強い決意と未来への憧れで輝く笑顔。

俺は生まれてきて幸せだ。

剣奴のときには生きる意味だなんて分からなかったが、今はっきりと理解した。

彼女と出会えたことに俺は感謝以外の言葉はない！

「さあて、気を抜きたいところだけど、問題はまだまだ山積みなんだから気を抜いちゃ駄目よレワタウ。

共存の難しさは理解し合うことの難しさだけじゃない。

奴隸身分だったシャクコポル族が一斉に奴隸でなくなるんだから

税や諸外国との国交にも影響はあるんだから。
休んでいる暇はないわよ」

「そういう難しいことはお前に任せるさ。
俺はただカルラの側にいる。
与えてやれるのは安心感だけさ」

とは言っても、ギリヤギナ族の文官はほとんどが宰相に付いてい
たからこの戦で死んでしまった者も多いだろうしな。

新しく登用するにしてもしばらくは俺の仕事は多そうだ。

だがそんなことはあとで考えればいいさ。

触れ合うことのできる距離にいる友の顔を見合せて二人して笑い
合う。

見回せば誰もが俺達のように笑顔でいる。

その手には剣を持っておらず、それぞれに目の前の仲間の手を取
っている。

同じラルマニオヌという国に住む、種族に関係ない仲間の手を。

ただそれだけで笑顔が溢れる。

これを作ったのはカルラだ。

俺は彼女の考えを信じて付き従っただけだ。

「あら、その『信じる』ということが出来ないからこれまでこの国は戦をしてきたというのに随分と簡単に言うのね」

「そりゃそうさ。

俺が信じたのはカルラだからだ。

他の誰でもない、カルラだから信じられた。

そこに無粋な言葉も他の理由も要らないさ」

ただカルラだから、信じられたのさ。

「ふふ、それじゃあ貴方に信じられる私であり続けなくちゃいけないから大変ね」

「そう気張らなくてもいいさ。

俺はいつまでもカルラの側にあることを誓ってるんだからな」

そう、誰もが幸せを求めていれば本来争いなんて起きるはずがないのだ。

だから俺は手を伸ばした。

剣を捨てた手に、心から信じる友の手を掴むために。

この世に不可能なんてない。
この喜びを皆で分かち合うのは……少し難しかったがな。

第17話：剣を捨てた手に掴むもの（後書き）

終わったああああー！！！！

一日から連載を始めるのがカッコイイという謎の考え方により少し投稿を早めたために最終話直前でストックが完全に切れるという事態になりましたがなんとか完結！

……反省点としては、共存という未来を得るために支払っていく細かい問題を第二部以降に丸投げする形になってしまったことでしょうかね。

ラルマニオヌは大国ですし、すぐに何処か他の国に攻められるってこともないと思いますが、他国との戦はありそうですし。

と言うか原作に突入したら絶対シケリペチム国のニウエとかが絡んでくるでしょう。あの戦馬鹿w

まあ、その辺の問題はここで長々と書いてもあれなんで、あとで活動報告にでもまとめて書くことにします。

第二部もまだ全然話がまとまってませんが書く予定はありますので、そちらもお楽しみいただけるよう頑張ります！

では！ 『剣を捨てた手に掴むもの』ご愛読ありがとうございます！
しました！！

登場人物設定（前書き）

キャラ設定です。

そこまで細かく作ってはいませんがこれから先どうするか、といった自分の指針としても書いたものです。

第二部が始まればいいのですが……。

登場人物設定

レワタウ

本作の主人公。シャクコポル族。

容姿は『カオスレギオン』のジーク・ヴァールハイトをモデルにしている。

赤い髪に白い外套。カルラの御側付きに抜擢された元剣奴。

武器はショーターとパリングダガーを装備し、籠手は地味な黒色に染めている。

10歳の時に剣奴として買われ、王都にて13歳になるまで戦い続けていた。

村にいた頃は、たまに来るエヴェンクルガ族の英雄ゲンジマルから剣の手ほどきを受けており、個人での修練も欠かさず行っていたために、かなりのもの。

夢も希望もなかったが、カルラとの出会いによって自分の生きる意味を見出し、固い友情の元に剣奴の頃よりも厳しい戦いに身を投じた。

そして希望を掴んだ者。

戦を終えた後は、両種族共存の未来を掴むために侍大将オムツイケルの役職となりカルラの側近として、友としてあり続ける予定。

身長164?、体重52?、13歳

原作突入時では180?を越えると思います。

カルラウアツウレイ

本作のヒロイン。ギリヤギナ族。長いから「カルラ」と略される。

服装は原作のまんま。極稀に礼装を着ることもあるが国内での政にも普段着のまま参加する。

しかしこの作品では皇なので戦に出るよりも政を中心にしていくので原作の大剣を出すかは不明。

大剣使いは作者が大好きなので出したいですが、レワタウじゃ持てないし、かといってカルラ本人を今更戦場に出すのはどうも……。

子どもの頃から酒好きで幼馴染のウルトともよく飲む。

ギリヤギナ族の強さのみが正しいという考え方では国として長続きをしないと感じ、自分の意思で国の改革をするために立ち上がる。

レワタウには自分と似たものを感じて友となるが、最近ではそれ以上の感情まで芽生え始めている。

一応まだ、「初めて手を取り合う未来を目指した愛すべき友」のまま。

弟のデリが自分に甘えてくるのには少し鬱陶しく思いながらも突

き放せない。

ラルマニオヌ国の皇に即位してからは両種族の関係改善に尽力する。

身長156?、体重52?、13歳

原作では、ギリヤギナ族は女性であっても筋肉質で、女性らしい柔らかさがない、とカルラ本人が言っていましたので少し重いかもしれないですね。

ヒエン

レワタウが両親を亡くしてから世話になっていたのがヒエンとサクヤの家だったために兄として慕っている。

エヴェンクルガ族の英雄ゲンジマルの孫でもあるが、剣の腕は凡庸。

そのため力をひたすらに求める時期もあったが、同じシャクコポル族でありながら国の英雄とまでなったレワタウのひたすら努力してきた姿を見ているので安易に力のみを目指すことはないと思う。

身長135?、体重37?、10歳

ハウエンクア

作者が個人的に大好きなキャラなので出番を増やそうと思っていたが、第一部ではそこまで出番多くなかった。

この作品ではレワタウの影響から、シャクコポル族という弱小種族ながら、折れない心と慈しみの心を持っているので段々と成長していく予定。

原作で出ていたロボットの「アブ・カムウ」がないので純粹に劍の腕を磨いている。

ヒエンに対抗心を燃やしているが、ライバルだとも思っているので切磋琢磨していく関係として描ければ、と思う。

身長134cm、体重36kg、10歳（ヒエンより背が低いのを気にしている）

ゲンジマル

エヴェンクルガ族の戦士。『生ける伝説』とまで言われる武人であり、カルラの提示する共存の未来を実現するために協力する。

孫の成長に嬉しく思う今日この頃。

戦が終わってからは特に命のやり取りをする機会もなくなり、一

人の武人として己自身を鍛えるために剣を振ることに喜びを感じている。

それとこの話の最後の戦いで最も活躍していた人。

ぶっちゃけ原作ではラルマニオヌ皇が強すぎたために、ゲンジマルが相手をせねばならなかっただけで、ラルマニオヌ皇がいなければゲンジマルは雑兵相手に無双が出来るので負傷者や戦死者を減らすのに大いに貢献出来たという感じ。

原作のクンネカムン国のように「大老」になるかも。

身長188cm、体重92?、53歳

デリホウライ

カルラの弟なのだが、まだ幼いために姉離れが出来ないでいる。

カルラの御側付きのレワタウのことも兄のように慕っており、そのことについてヒエンとハウエンクアが妬ましげに見ることもしばしば。

原作ではけっこうなシスコンで独自のフィルターを通して見ていたからか、えらいカルラを美化していましたが、この作品ではレワタウから男らしさを学んでいく……かも。

まだ決まっていらないが第二部以降ではウルト経由でカミュと会わせるのも面白いと計画中。

でもウルトがカルラと同じ年ということは、アルルウと1、2歳しか違わないカミュと付き合うってこのはけっこう問題な年の差かも。

身長125?、体重25?、6歳

ゴウケン

ラルマニオヌの宰相。

かつて友と信じていた者に裏切られ、シャクコポル族を根絶やしにすることで争いをなくそうと考えていたが、過去の自分と同じ理想を掲げ、それを実現させようとしているカルラとレワタウに惹かれてしまった男。

理解し合う心を二人が持っているのを羨ましく思いながらも、自分のかつての夢を託して死んだので本人は自身が殺したラルマニオヌ皇と同じく満足した死であった。

身長172?、体重61?、32歳。

登場人物設定（後書き）

第二部は本当にまだまとまっていないんですね。

案としてはこのままハクオロとディー（ウィツアルネミテアとオンヴィタイカヤン）を出さない話ってことにすれば辻褃合わせも上手くいけますし、綺麗なヌワンギが書けそうですねけど本当に迷走中。

タグの「腹黒ウルト」は、原作ではベナウィがほとくとずっと一人身でいそうですから、ねっとりウルトが迫る話を書きたいと思ってつけたタグですし、その話を書くには第二部に行かなければいけません。

しかしそうなるとオボロはともかく、ユズハは誰の子を生むのかという問題も残ります。

アルルウ、ユズハ、カミュの少女三人組は、ハクオロ曰く、アルルウとカミュは一つか二つしか年が違わないらしいのでそれぞれ原作では12、13、14歳くらいと仮定していますが13歳の少女に手を出せる奴はハクオロ以外にはいないでしょう。

世界観的には不自然ではないのかもしれませんが難しい……。

ハウエンクアの活躍としては、ケナシコウルペを潰したあと、その皇に据えるってのも考えているのでハウエンクア×ユズハというのもありかも知れませんが。

とにかくこれまで読んでいただきありがとうございました♪

第二部はいつになるかは分かりませんが書きたいとは思っております。

しかしいま更新を少し休んでいる7作目を完結させたあとはオリジナルでギャグな作品を予定しているのでいつになるのか……。

まあ、気長に応援していただければ幸いです。

何度も繰り返しますが、本当にこれまで読んでいただきありがとうございました！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9783v/>

剣を捨てた手に掴むもの

2011年11月14日09時26分発行